

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# DePOLA <sup>でほら</sup> 27

2004年  
秋冬号

## 特集 自然と人と生き物が輝く—里山



宝くじ

本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

## 山

裾のゆるやかな斜面の里、そこには雑木林があり、その周辺には棚田があり、小川や溜め池、古い農家が点在する。山裾から広々とした平地になると、川は広くなって堰堤が作られ、周辺には整備された田んぼや畑が広がり、その一角に家々が集まって集落を形成し、大きな樹木が茂る場所は大い小学校や鎮守の森だったりする。

これは、身近に親しんでいる農村風景、つまり「里山」である。日本人が先祖代々、自然と共に暮しながら農林業などを営んできた場所・ふるさとである。

いま「里山」が人気を呼んでいる。自然とふれながら動植物観察、野外遊び、キャンプ、ハイキング等を楽しむ他、雑木林や棚田の手入れ、河川敷き等の草刈り、炭焼きなどをする「里山」関連のグループが増え、里山シンポジウムなども開かれている。

当初は都市近郊にある雑木林や田んぼ、池などを保全しようという市民運動としてスタートし、それが「里山」という言葉が普及させた。しかし現在は、棚田オーナー制度の普及や、農山漁村と都市住民との交流活動が高まり、さらに総務省や農林水産省等が「美しい景観」「棚田百選」等を選定して、その地域の保全や観光的価値をアピールする取り組みが行われ、里山は全国のすべての地域を包括した言葉になってきている。

「里山」と一口いっても、山林、農地、草地、水辺と多岐にわたり、そこに暮らす人々の生活も異なる。住みながら農林業から遠ざかっている人もいるし、都市から来る人もいる。亜熱帯の沖縄地方から雪国、寒冷地の北国まで変化に富んだ日本列島は、里山の景観も大きく異なるし、季節によっても変化する。地域の歴史や風土も違うため、里山に関するイメージや価値観も微妙に違ってくる。

だからこそ、「里山」の魅力は尽きず、日本

が世界的にも最も魅力ある「里山の国」だといわれるのも納得できる。(本号12ページで、日本の里山に恋して全国各地を歩いているケビン・シヨートさんのエッセイを掲載)

## そ

こで、あえて「里山」を定義するならば、自然や動植物の恵みを受けながら、それを人々が手入れしたり変えながら生活してきた場所、ということができる。里山を代表する雑木林は、落葉を腐葉土や薪に使い、樹木も薪や建材用に活用する身近な山。活用することで山は手入れが行き届き、沢山の恵みを与えてくれた。溜め池や棚田、用水路なども同様である。

しかし、農村を取り巻く人々の生活や意識の変化、過疎化や高齢化などで、人が手入れすることで保全されてきた豊かな自然環境は悪化し、その地域に生存していた貴重な植物や昆虫、水生生物などの生き物が絶滅の危機に瀕している。近代的に整備された田は作業しやすくなったが、農薬や化学肥料を使うことで、本来自然の持つパワーや微生物の繁殖が失われた。子供たちにとって楽しい遊びや冒険の場所だった川や沼・池なども整備されたのを機に魅力ある自然環境が失われてきた。

日本古来の春・秋の七草、フジバカマ、サクラソウ、キキョウ等の草花、メダカやタナゴなどの水生生物、野からはトンビやホオジロ等の野鳥、二ホンミツバチ等が消え、反対に帰化植物や害虫が増えて、農林業にも影響を与えている。自然と共存して暮らすという日本人の生き方にも微妙な変化が見られるようになった。

これらの様変わりしてきた地方の風土や自然環境を再生し、本来の姿に戻そう、新しい里山を作っていくことという動きが出てきた。

本誌「でばら」では、25号の「私のオフィスは自然郷」(新しい農業の取り組み)、26号

の「日本の森林を育てる」特集に次いで、今回は里山を特集することにした。

## 里

山として注目、取材した地域は「自然と人と生き物」

里山を代表するものとして、棚田や茅葺き民家、石垣の保全など、先人の築いた文化と風土を保全する事例、ホタルやトンボなど動植物の生息する里づくり事例、雑木林の手入れ等の事例があげられるが、本誌ではさらに一歩すすめて、自然環境保全を積極的に推進していくことで地域の産業や経済生活に新しい魅力と方向性、活力を生みつつある地域を紹介することにした。

その一例が、田んぼに水を張って水生生物や微生物を育て、自然の力で美味しい有機米を作るといふ不耕起田、各地から消えてしまった葦原を保全していくために葦を商品化して活用する人々、減少している日本ミツバチを守り増やす努力をしている人々などを取材した。それらを含めて「自然と人と生き物が輝く地域」を「里山」として提案したいと思う。

そこには自然や生き物を心から愛し、少年のような感性と夢を持ち続けて野山や川辺を走り回っている魅力あるお父さんたちがいた。地域のリーダーでもあるこれらのお父さんたちは、里山の素晴らしさや自然や生き物にふれることの大切さを、青少年や地域の人々に伝えるための努力もしている。

そんな地域や人々に、私たちも夢をふくらませて見守り、こころから声援していきたいと思う。

「でばら」編集部

(財)過疎地域問題調査会

「自然と人と生き物が輝く——里山」  
特集企画に寄せて



「自然と人と生き物が輝く一里山」特集企画に寄せて——2

## 懐かしいふるさとに出会う

- ・日本の原風景、棚田と竹林を守る  
(栃木県茂木町 入郷地区・竹原地区)——4
- ・歴史とロマンの里・田麦俣  
月山・湯殿山詣で賑わった「六十里越街道」(山形県朝日村)——7
- ・「美しい日本の村景観」一位になった  
田園散居集落(山形県飯豊町 豊原)——10



北上川・葦原でのシジミ漁  
八子追いの富永さん夫婦



## 生き物が豊かに暮らす自然郷

- ・トキが大空へ翔ぶ日に向けて  
生き物と共生する田んぼづくり  
(新潟県佐渡市新穂)——14
- ・水生生物と伝統素材の宝庫  
北上川河口の葦原と共に  
(宮城県北上町)——18
- ・日本ミツバチを守る  
八子追い人の里(長野県中川村)——21
- ・奥薩摩の水と緑の郷  
川内川の「ホタル舟」  
(鹿児島県鶴田町)——24

## 先人の遺産を未来へ

- ・耕して天に至る石垣段々畑  
(広島県倉橋町 鹿島)——27
- ・一千年の時を積む 石垣棚田  
(山口県徳地町 三谷)——28
- ・山津波の教訓を今に 四谷千枚田  
(愛知県鳳来町)——31
- ・石積で山間部を近代的な農地に  
戸川石垣の集落(宮崎県日之影町)——32



石垣段々畑(広島県倉橋町)



高さ12mある日本一の  
石垣・日之影町戸川

## [エッセイ]

### 里山ニッポンの魅力 ケビン・ショート——12

## INFORMATION——34、35

・農林水産業に関連する文化的景観の保護  
対象地域及び重要地域の一覧(過疎指定市町村)

2004年過疎シンポジウム 35  
編集後記/奥付 35

## 「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地域で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

## 表紙 写真

左上/山形県飯豊町豊原地区の「田園散居集落」

左下/佐渡市新穂の「不耕起田」案内してくれる齊藤真一郎さん  
右上/宮崎県日之影町「戸川石垣集落」。石垣の草取りをする坂本美穂さん

右下/宮城県北上町、北上川河口の葦原保全をする熊谷貞好さん  
中/キイロスズメバチ。長野県中川村はこの八子の巨大な巣等で「八子博物館」を開設している



栃木県茂木町の入郷地区には、「日本の棚田百選」に認定された美しい棚田がある。ホタルやハッチョウトンボが生息する豊かな自然郷だ。

また、茂木町竹原地区は昔から竹林が多い。しかし、ともに地域の高齢化や後継者不足などが原因で、近年、耕作放棄地が増え、荒廃が目立っている。日本の原風景ともいえる棚田と竹林をどのように守っているのか…村人たちの取り組みを追った。



棚田の美しい風景は、生活の営みの中で守られてきた

栃木県茂木町

入郷地区・竹原地区

# 日本の原風景、棚田と竹林を守る



ボランティアの力を借りて  
耕作放棄地を復活

栃木県南東部に位置する茂木町は、面積の70%が標高200m前後の山里。県下でも有数の棚田が多い地域だ。なかでも、入郷石畑地区の棚田は比較的規模が大きく、1/8の傾斜と4.9haの広さ、187枚の美しい棚田があることから、平成11年に農林水産省の「日本の棚田百選」に認定された。

しかし、実はその頃、入郷地区では、農業従事者の高齢化や後継者不足などから、年々耕作放棄地が増え続けるという現状に悩んでいた。

「せっかく『棚田百選』に選ばれたのに、草が生い茂り田圃が荒れてしまっ、お米が作れない棚田がいくつもあつたんです」

当時を振り返って、そう語るのは、入郷棚田保全協議会会長の大町弘志さん。

「入郷棚田保全協議会」を組織したのは、その翌年のことです。平成12年に、中山間地域等直接支払制度の対象農地に該当したこともあり、石畑の棚田の所有者7名の農家が集って結成しました。そして、まずは、耕作放棄地の整備に取り組むことにしたんです」

しかし、7人の力だけではどうにもならな



昔ながらの方法で田植えをする棚田オーナーの人たち



町さんは話す。「たとえば、田圃は、雨が降ったとき雨水を一時的に貯め、一種のダムのような働きで、雨水が一気に川に流れ込んで洪水が起こるのを防ぎます。また、土砂崩れを防ぐ効果や、水を浄化する効果、貴重な動植物を守る効果もあります。入郷地区では、農業はほとんど使わないので、田んぼ

入郷棚田保存協議会会長の大町弘志さん(左)と事務局の五味淵芳章さん

「日本の棚田百選」に認定された石畑の棚田

い。そこで、マスコミを通じてボランティアの協力を呼びかけたところ、町内外からおおよそ70人が集まってくれた。周辺農家の人たちとボランティアが力を合わせ、草刈りに汗を流した甲斐あって、荒れていた棚田は見事に復活した。

「その後も、古代米の田植えや稲刈り、草刈作業など、ボランティアの力を借りて棚田の保全活動に取り組んでいます。また、平成14年から、都市と農村の交流の一環として、棚田オーナー制度を実施しています」

年会費3万円でおおよそ1000㎡の水田のオーナーになり、くる掛け、田植え、稲刈りと一緒に農作業を体験。そして、収穫した米のほかに、地元で採れるシイタケなどの農産物をお土産に持ち帰ってもらう。豊かな自然の中で気持ちのよい汗をかき、地元農家や自然と触れ合うことができるとあって、参加者の反応も上々。3年目を迎える今年は、オーナーの数が37組になった。

歴史ある棚田と、そこに生息する貴重な動植物を守れ!

大町さんによると、石畑の棚田は、戦国時代からつづく歴史のある水田だという。「古文書には、1561年(永禄4年)当時、入郷には、戸数22戸、人口155人の村人が住んでいたとあります。この戸数と人口から推定すると、それよりかなり以前に、祖先はこの山間地に居を構えたと考えられます。入郷地区は全体が山間部ですが、中央の谷あいをも須川が流れ、溪谷を作っています。祖先は、水が豊富で土質の良さそうな沢沿いを水田として開いていったのでしょうか」

そもそも、稲作の歴史をひもとけば、平野に水田が作られるようになったのは、水を引く技術を得てからのことで、それ以前は、山の水が流れ込む斜面に田圃を作った。谷津田や棚田は、先人たちの知恵の結晶なのである。棚田を守ることは、お米が作れるだけでなく、祖先から受け継いだ貴重な財産を守ることであり、それ以外にも多くの利点がある、と大町さんは話す。



棚田保存会の人とオーナーたちが田植え(写真/茂木町提供)

の中に微生物や昆虫が棲んで、水を浄化してくれる。水がきれい、エサとなる昆虫がいるから、動物が集まるというわけです」

春になるとウグイスが鳴き始め、田圃に水が入ると夜にはカエルの大合唱。6月になると昼間はトンボが舞い、夜にはホタルが幻想的な光を放って水田の上を飛び交う。

「日本一小さなトンボ、ハッチョウトンボも生息しています。実は、地元に住んでいる我々はそれが珍しいとは思ってなかったのですが、外から来た人に言われて、貴重だということに気づかされた。これをきっかけにして、自然を守るという意識も芽生えてきました」。

上/「竹原郷づくり協議会」会長の渡辺勝美さん  
下/竹林の間伐作業に汗を流すボランティアの  
「竹取応援団」



### 棚田米を使った地酒も売り出し中!

茂木町の棚田米は、魚沼産のコシヒカリに匹敵するほどおいしいと、地元の人には胸を張る。茂木町の棚田米がおいしいのは、「水と土」がいいからだという。

「水は、山から自然に湧いてくる清水。上に人家がないので、生活排水も流れ込んでおらず、非常にきれいな水です。また、茂木町の土は粘土質なんです。昔から粘土質の田圃で採れる米はおいしいといわれています」

そのおいしい米を利用して、茂木町棚田活性化協議会では、平成13年から地域限定の地酒「棚田の雫(720ml 1680円)」を販売している。また、平成15年11月から、「もてぎ棚田のお米(5キロ2900円)」の販売も開始。どちらも売れ行き上々だとか。

棚田保全の取り組みを始めてから、新たな町の特産品が生まれ、自然が蘇ったり、

予想外の成果があった。なかでも、最も大きな収穫は、これまで交流のなかった人たちと接する機会が増えたことだと、大町さんは話す。

「オーナーは現在37人ですが、家族や友人、会社の同僚などを含めておよそ100人が行事に参加されます。彼らと交流することで、地元の人たちにもやる気が出てきて、村が活性化するように感じます。また、街からやって来た子供たちが田圃の中でどろんこになって作業をし、楽しそうに目を輝かせているのが印象的です。遊園地に行くと喜び感動とはまた違った喜びがあるでしょう。米作りがいかにも大変を経験し、食べ物大切にすることができるようになったというのを聞くのも嬉しいことです」

### 竹林の侵食から里山を守る

一方、同じく茂木町の竹原地区<sup>竹原</sup>では、竹林整備の運動が行われている。

竹原地区は、その名の通り、昔から竹の多い地域である。ところが、竹林所有者の高齢化が進むにつれて、管理の行き届かない竹林が増えてきた。竹がはびこると、他の植物が枯れてしまい、里山が荒廃する。また、密集した竹林では、根元に光が届かず、おいしいタケノコも採れない。

そこで、「竹原郷づくり協議会」では平成16年の初めに、荒れた竹林の整備に協力してくれるボランティア、名づけて「かくや郷竹取応援団」を募集した。すると、宇都宮など近隣の町から90人も参加者が集まり、竹の間伐作業や倒れた竹の片付けなどを手伝ってくれた。

「竹原郷づくり協議会」会長の渡辺勝美さんによると、

「参加費を1000円いただき、昼食に竹筒ご飯やとん汁を振る舞いましたが、これといったお土産もつけてないんですよ。それでも参加者の方々は喜んで汗を流してくれて、また参加したいと言ってくれました。これには私もびっくりしました。ふるさとの自然を守りたいという意識を持ってくれているのでしよう」

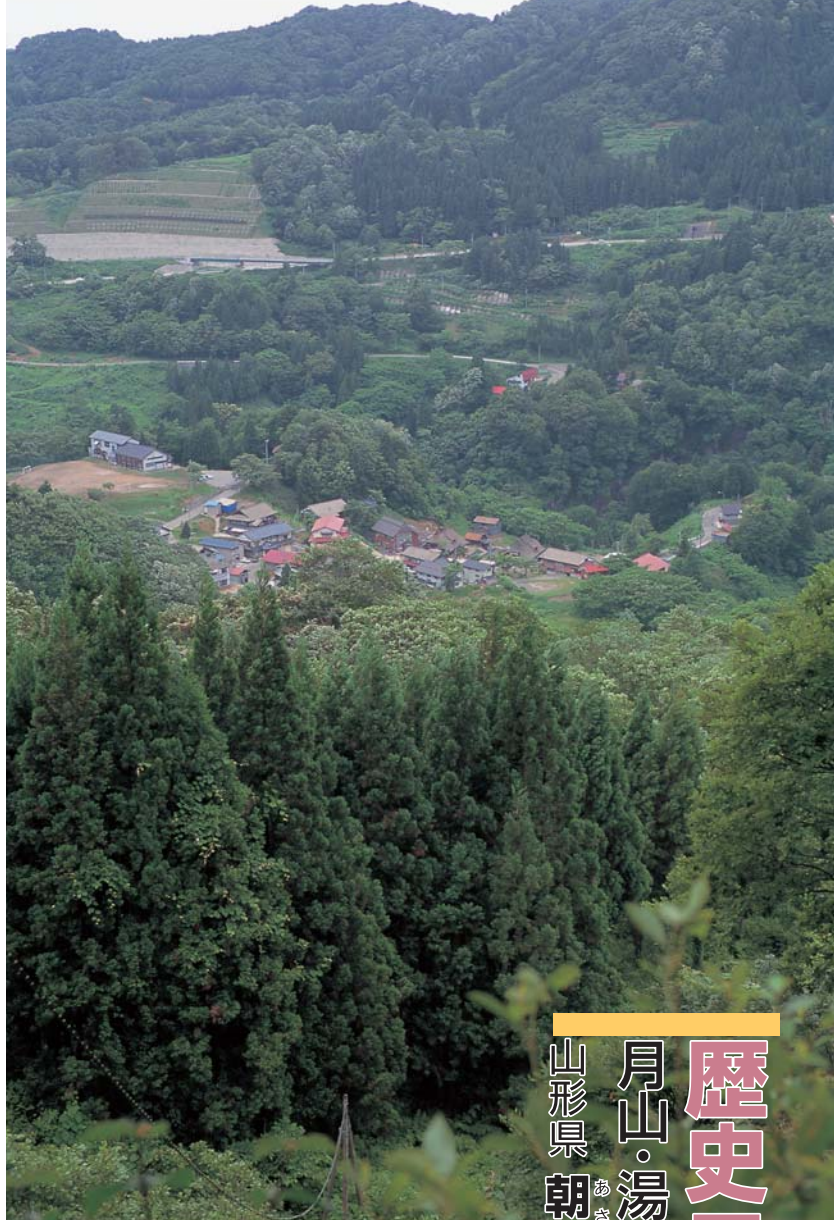
「竹原郷づくり協議会」では、今年3月から、年間を通して農作業を体験し、地元農家と交流する「竹林のオーナー制度」にも取り組んでいる。こちらは年会費3万5000円で、さまざまな特典がつく。たとえば、タケノコ掘り体験、地元の竹細工職人を招いての竹細工教室、竹炭づくり体験、田植えや稲刈りなどの米作り体験。もちろん、収穫した米の一部(10キロ程度)は持ち帰ることができる。ほかに、ホタルの観察会や、収穫した米で餅つき大会を開くことなども計画している。

本格的な活動はこれから。それでも、「手ごたえは十分感じている」と、意欲をみせる渡辺さん。竹原地区に、美しい竹林の蘇る日が来るのは、そう遠くないに違いない。

(文/小田礼子 カメラ/小林 恵)



「もてぎ棚田のお米」と地酒「棚田の雫」は、町の名産品  
竹原地区の竹炭製品



弘法茶屋跡から見た田麦俣集落

# 歴史ロマンの里・田麦俣

たむぎまた

山形県朝日村

あさひむら

月山・湯殿山詣で賑わった「六十里越街道」

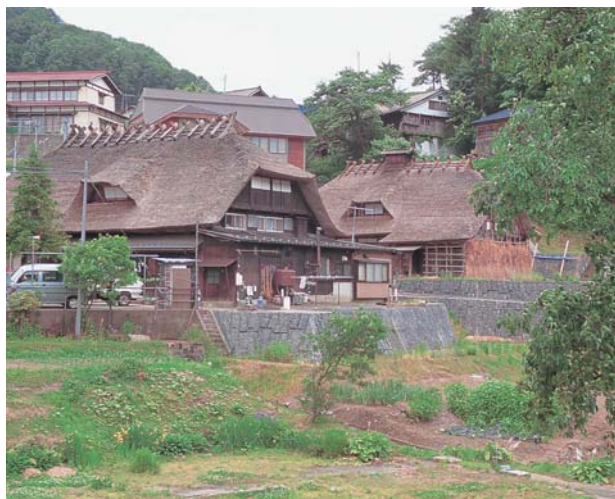


六十里越街道とは、庄内地方の鶴岡から十王峠を越えて田麦俣に入り、さらに大袖峠を越えて志津、本道寺、寒河江を通り山形城下に至る旧街道のこと。出羽国が設置されたのが和銅5年（712）というから、近世以前に既に存在した古い道で、湯殿山や月山への参拝道として栄えた。田麦俣はその中継地として重要で、宿場の村だった。豪雪と谷あいの風土の中で、「多層民家」といわれる独自の家が生まれ、昭和30年代まで32戸の茅葺き民家があり、旅籠も7軒あったという。今は山沿いにパイパスが出来て、訪れる人も少なくなつたが、豊かな自然と雪国の暮しが静かに息づいている。

## 山岳信仰の歴史とドラマの里

朝日村（人口6110人）は、朝日連峰を奥座敷にし、月山の広い裾野に抱かれた総面積569キロmの村。この面積は東京都23区の広さに匹敵し、90%がブナ等の山林で、42%の241キロmが国立公園に指定されている。

月山、湯殿山などは、伊勢、熊野と並ぶ三大霊場の一つで、古くから山岳信仰の聖地として村びとの暮らしにも関わってきた。東北自動車道、山形、鶴岡を結ぶ酒田線、朝日スーパーラインの開通で、気軽に訪れることのできる観光地として賑わい、農林業で暮らして



茅葺き多層民家の渋谷さん宅と旧遠藤家

きた村民の大半が鶴岡市などへ通学・通勤するようになっていた。

山岳信仰、出羽三山への道として古代より賑わった「六十里越街道」は現在「月山花笠ライン」と名を変えて親しまれているが、一歩村に入ると、昔の暮しを忍ばせる民家や月山信仰と深いかわりを持つ寺や遺跡があり、歴史ロマンへ思いを馳せることができる。私も個人的に何度か訪ねている月山だが、ブナの生い茂る山道を散策したあとは、まず

森敦が滞在した注連寺には石碑と文庫棟が立つ(上)  
六十里越街道「弘法茶屋跡」には灯籠と石碑が残る(下)  
田麦俣集落入口近くにある名勝「七ツ滝」。深い渓谷  
に七筋の滝が轟音を立てて落下している



古くから宿場の村として賑わってきた田麦俣集落へ立ち寄る。集落の入口付近にある七ツ滝を見て、多層民家のある田麦俣で懐かしいふるさと「の雰囲気味わう」。

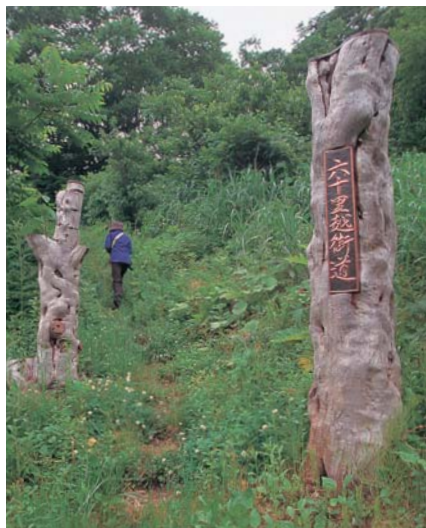
次に六十里越街道を北西に向かって七五三掛集落の「注連寺」と、霊場「大日坊」の寺院へ。注連寺は、森敦が何度か滞在中に書いた小説『月山』(第70回芥川賞受賞)で知名度を高め、境内には「月山 すべての吹の寄す

るところ。これ月山なり」の森敦の名句石碑と、原稿等を展示する森敦文庫を併設している。大日坊は大日如来像や真如海上人の即神仏(ミイラ仏)を安置する寺で、他にも各地の様々な神たちを祀っているユニークな寺。

両寺とも、即神仏が安置されていることで知られるが、森敦の『月山』には、行き倒れになった人々が即神仏になった話などが書かれていて、険しい山岳道にまつわる生と死のドラマが蘇ってくる。

### 茅葺きの多層民家の保存と活用

森敦は、その夜我々が宿泊した民宿「かやぶき屋」にも宿泊しており、さらに画家でア



森に分け入って六十里越街道が続く

マチユアカメラマンとしても凄腕だった岡本太郎もこの地を愛し、田麦俣が茅葺き民家の集落であった頃をダイナミックに撮影している。

六十里越街道の大切な宿場だった田麦俣は、狭い谷あいの土地を利用した小さな集落で、現在21戸130人が暮らしている。宿場としての面影は現在2軒だけ残っている茅葺きの多層民家。昭和30年代には総戸数54戸の

うち32戸が茅葺き多層民家だったという。

現存している2戸は、民宿を営んでいる「かやぶき屋」渋谷一志さん(52)の家と、そのすぐ裏手に建つ旧遠藤家住宅。元庄屋で築200年になる旧遠藤家は昭和49年に山形県有形文化財の指定を受けて半解体復元工事をを行い、兜造りだった明治10年代の姿に復元し、一般公開している。

当初は寄せ棟造りだったが、明治に入って養蚕が盛んになると屋根を改良して、妻側を「高はっばつ」という輪郭と反りがうつくしい「兜造り」にし、一、二階を住居と作業場に、三階を養蚕場に当てた。

民宿「かやぶき屋」は築180年。集落から次々と消えていく多層民家を保存しなくてはいけないという渋谷一志さんの父親・幸雄さんの必死の思いから民宿として出直した。地域の活性化に熱心に取り組み、新しいことが好きで、雪場も走れるスノータイヤ付きの耕耘機を購入して畑へ出かけたが転落事故に会い、平成8年に78歳で死去した。一志さん(52)は学校を出ると東京方面に働きに出いたが10年ほどでUターンして結婚。いまは母親のミチさんと民宿を営んでいる。

「室町、江戸時代から田麦俣は六十里越街道の宿場として賑わい、旅籠が7軒、他に簡易宿もかなりあったといえます。街道が廃れてからは宿屋としては食べていけなくなり、今では2軒だけ、私のところも働きに出ながら営業しています」と一志さん。

一志さんは、遠藤家の管理も頼まれていて観覧者を手配、ガイドするほか、茅葺き屋根の葺き替えや補修も行っている。

「県が多層民家への助成金が少ないので専門業者に頼む費用がでない。そのため屋根葺きの技術を学んで、毎年部分的に改修し、2、3年かけて総てを改修しています。沢山の茅

・朝日村企画課商工観光係 ☎0235-53-2111

・民宿かやぶき屋 ☎0235-54-6103



を入れるので材料の入手が大変です。問屋を通して購入していますが、北上町・熊谷産業の茅は、海水が混じった河川で育っているせいか丈夫で葺きやすいですね」と渋谷さん。ところがこの日は、季節外れの台風6号が日本海に抜けて秋田・山形に上陸、宿の囲炉裏で夕食を囲んでいるところから激しい風と雨になってきた。「強風が茅葺きには大敵です。茅が飛んでいってしまったり古い板戸が壊れたり」と言っている間にもガラス戸や障子がガタガタうなりだし、渋谷さんは外へ飛び出していった。

武者のかぶった兜の姿に似ていることから名前が付いた兜の部分の茅が崩れだしている。高いはしごを家族が支え、登った一志さんはロープで崩壊の拡大を防ぐための処置をする。落下してくる茅は素早く集めて束ねておかねば。奥さんと二人の子供達、母親も総出で手伝った。長男の満徳君は屋根に登って父親の作業を支え、近所からは男性も手伝いに来てくれた。台風は夜半前に去ったが、一志さんの点検補修作業は遠藤家も含めて深夜まで続いたという。「古き良きものを守る」ことの大変さを実感した夜だった。

### ブナ原生林に行く六十里越街道

六十里越街道は、出羽と最上を結ぶ官道として開かれたが、室町・江戸時代になると月山・湯殿山参拝者で賑わうようになり、参勤交代や軍馬輸送、さらに海からは魚介類や塩、内陸からは紅花、真綿、豆、葉煙草を背負う人々が往来した。明治の末に新道が開通してからは利用者は減ったが、歩道には当時の面影を残す史跡が多く、ブナ、ヤブ椿等の原生林が見事だ。

七ツ滝の脇から旧街道へ入ると、足元にはミズなどの山菜が生い茂り、ブナや古木の原

生林が生い茂る緩やかな坂道。やがて「弘法茶屋跡」へ着いた。弘法大師が休憩した場所といわれ、近年まで地域のお年寄りが手作りの団子等を持ち寄って皆に振る舞ったという。街道は、馬の荷物を組み直した馬立、ブ



ナの紅葉が街道一美しいという花の木坂、独鈷清水等を経て細越峠へ至り、梵字川を越えると湯殿山入口の仙人沢に到着する。六十里越街道への関心が高まる中で、村ではお洒落な小冊子を制作、看板の整備を行っている。観光地・朝日村として、特色をいかけた産業おこしも盛んで、「月山ワイン」や山葡萄商品の特産地として知名度が高い。また初夏まで滑れるスキー場、渓流でのパンジジャンプ、カヌー、フィッシング等、豊かな自然を生かしたスポーツの里として若者に人気を呼んでいる。

(文/浅井登美子 カメラ/小林 恵)

上/民宿「わらぶき屋」では囲炉裏で採れたてのイワナを焼き、コゴミ、ミズ、曲り竹等の山菜料理でもてなす



台風の襲来で、家族総出で茅葺き屋根の保護と修理に当たる



翌朝、野球大会の会場へ向かう渋谷さんと長男満徳君(中2)。将来は父親の後を継いで民宿をするときっぱり言う



見渡す限りの水田地帯に、バランスよく配置された屋敷林。樹齢数百年の木々が家や蔵をすっぽり覆い、それぞれに生活宇宙空間を創っている。長い歳月が育んだ稲作文化と、圃場整備等による近代的農業の絶妙な調和。景観コンテストで日本一に輝いた。



屋敷と水田の間には水路がある。水のきれいな小川だ

和38年に当時としては全国でもいち早く水田の圃場整備に着手した。現在のこの景観は、集落の昔ながらの生活風土や自然と、整備されて美しい近代的な生産大地の景観が融合したものといえる。

平成5年に農林水産省と農林漁業4団体が主催する「第1回美しい日本の村景観コンテスト」が行われ、180点の応募の中から飯豊町豊原の田園散居集落が、生産部門で最高賞の農林水産大臣賞を受賞した。第一回目のコンテストで日本一になったことが、町民や豊原地区の人々の励みとなり、以前にも増し

飯豊町は南部が飯豊連峰を経て福島県に接する、いわば山形県の玄関口に当たる町。町の東北部は、飯豊連峰の豊かな水を集めて南北に流れる白川沿いに広がる肥沃な水田地帯で、東北を代表する米どころとして知られる。

中でも豊原地区は、1200haにわたって広がる田園地帯で、昭

「住民参加による地域づくり」の先進地



山形県飯豊町 豊原

# 美しい日本の村景観一位になった 田園散居集落



出羽三山詣に行く人々が精進潔斎に籠ったという木小屋(上)松山さん(左)と観光協会二瓶さん



て景観の保全に注意をはらっているという。飯豊町観光協会事務局の二瓶裕基さんをお願いして地域をガイドしてもらった。

まずは散居集落がよく見えるという北西部にある展望台へ。観音堂にクルマを停めてゆるやかな山道を歩くこと約10分、眼下に田植えを終えたあとの若草色の田園風景が見えてきた。水田の中にバランスよく配置された防風林と家屋敷。防風林がすっぽり覆っているので、遠目からは各戸の屋根や壁、農機具などの生活関連施設が見えない。それが景観としては完璧なまでに絵になっている。

それにしても、最近では農村にも工場やコンビニエンスストアなどが出来て当たり前だが、豊原地区の散居集落群の中にはそのようなものは見当たらない。

それについて二瓶さんは「当町は1970年代に『町民参加』の町づくりに取り組み、住民自らが自分たちの地域をつくっていくという町づくりを取り入れました。土地利用や景観の保全なども住民参加で30年以上行って

きています。僕の祖父や親たちが偉かったそれを指導し取り入れてきた行政が勝れていたということですね」と言う。

この散居集落は何時頃形成されたのだろうか。町でもらったパンフレットには、「集落形成の歴史は定かではないが、水田農業が本格的に発達した頃」と記されているだけではつきりしない。そこで地域の歴史にも詳しい松山秀夫さんの家に伺った。

### 自然と人を繋ぐ屋敷林

松山秀夫さんの家屋敷は570坪、平均200〜300坪というからかなり広い。家屋敷を囲んで小さな川(用水路)が流れ、道路から屋敷に向かう時は川に架かった小さな橋をわたる。入っていくと広々とした敷地の正面に茅葺きだったという本家があり、蔵や物置き小屋、離れなどの建物が数棟並んでいる。多分この地区は、古くから広い農地や屋敷を持つ豪農たちの集落だったのだろう。

この屋敷の北側に植えられているのが防風の役目も担う屋敷林。松山さんのお話だと、クヌギ、ヤチダモ、ハンノキなどは江戸時代に植樹したもので、スギやヒノキなどは比較的新しい時代になってからの植樹だという。

「上杉鷹山公がこの土地を制した時、クヌギなどの実のなる樹は飢饉がきても食糧に出来る、またタモの木は川に橋を作る時に真直ぐで硬い樹なので役立つと言ったという風に聞いています」

風雨や冬の寒さから家を守るという目的以外に、木の枝に茅藁、柿などを干したり、実を食したり、木材として活用する、さらには野鳥や小動物もやってくるだろうから、樹木は人々の暮らしを支え、心を和ませてくれる大切なものだと感じた。

しかし、何メートルと伸びているため剪定などは難しく悩みでもあるようだ。

ところで巨木の脇に六畳ほどの小さな木造の小屋があった。この小屋は地域の人たちが月山、羽黒山等の出羽三山へ参拝に行く前に「精進潔斎」するために籠った家だという。「7人が約3週間ほどここに入って自炊しながら山詣での準備をしたと聞いています」と興味深い話を聞くことができた。

取材の後、国内最大級という「どんでん平ゆり園」に入園してみた。22年前にゆりを愛好する地元有志たちが手作り公園として造成したのがはじまりで、昨年大規模ゆり公園としてオープンした。7haの敷地内に150種50万本のゆりが栽培されている。見頃は6月中旬から7月中旬までで、レストランや売店、ゆりの栽培指導などもあり、女性客に人気を呼んでいた。期間限定という贅沢な植物園で、他にイベント等に活用している。

(文)浅井登美子 カメラ)小林恵



飯豊町観光協会 ☎0238-86-2411

50万本のゆりが咲く「どんでん平ゆり園」  
飯豊町萩生 ☎0238-78-5587

# 里山ニッポンの魅力

私が日本へ来たのは1970年代初頭、一米兵士として日本のことを何も知らずにやってきたのだが、日本に来てみて本当に驚いた。こんなに豊かな自然環境に恵まれた魅力をたたえた村々がいくつもあるとは。

兵役を終えたら故郷のニュージャージーへ早く帰ろうと思っていたのだが、30年たった今も、こうして日本の田舎を歩き回っている。日本全国47都道府県のすべてに足を運び、いずれの土地も訪ねること二度三度。それだけじゃない、この国の変遷から歴史上の有名なまでちゃんと答えられるようになった。

## 山に恋し、野生生物に感激

いったい日本の何が、ぼくをここまで駆り立てるのか。

当初いた神奈川県の基地でも現在住んでいる千葉ニュータウンでもそうだが、日本では一歩外へ出ると、川が流れ、田圃と農村風景が広がり、そこから少し足を伸ばすと山々が連なっている。故郷のアパラチア山脈は野生生物は豊富だが、大変古い山なので風化が進み起伏がなだらかだ。それに比べて丹沢の山々は険しく急勾配の岩肌が天にそそりたつといった印象だ。このような山はぼくにとつて始めての経験で、たちまち日本の山に恋してしまった。本格的な登山用具を揃えると、丹沢から秩父、八ヶ岳へ、さらに南アルプスや北アルプスへも遠征するようになった。

登山の楽しさもさることながら、途中の田舎風景や土地のお百姓さんとの立ち話ももちろん日本語でが楽しい。どの人も気さくで親切に伝えてくれた。



思いがけない野生動物との出会いにも何度も驚かされた。

シカの群れ、ニホンザルの群れ(アメリカには野生のサルがいないので大喜びした)、他にイノシシ、テン、リス、ムササビ。幼い頃『ムササビのロッキー』というアニメが好きだったが、本物のムササビを日本で見られるなんて、驚きと喜びに打ち震えたものだ。

ある日秩父で大型ライフルを手にしたハンターのグループに出会った。何を追っているのかと聞くと「クマだよ」という返事が返ってきた。ぼくの故郷ではクマは絶滅している動物なので、クマが東京近郊に生息していると知って衝撃を受けた。

夏の楽しみはオニヤンマ。川辺を散歩するほかに挑戦するように頭上をジェット機なみの速さで唸るように行ったり来たりする。海を思わせる碧色の巨大な目は本当に美しい。羽を持つ昆虫としては日本が世界に胸を張って自慢できる最大級のものだ。

ケビン・ショート  
Kevin Short

自然の豊かさをもっと誇りに！

訪れる土地ごとにまったく違った表情をみせる日本の自然。改めて考えてみると、国土は狭いが、南北に長く伸びた地形のおかげで、南の亜熱帯から北の亜寒帯まで気候にかなりの幅がある。マングローブの森や珊瑚礁の海がある一方で、凍てつくオホーツク海がある。さらに高低差が大きいことが多様な動植物を育み、農産物や人々の暮らしもその地域ならではの特色に溢れている。

さらに、海岸線一つとつてみても表情は多様だ。黒松の林を背にした長い砂浜もあれば、切り立った岸壁の荒瀬があり、入り海には干潟や葦原などの湿原もある。山里や森の樹木が紅葉樹、広葉樹と変化するのも日本ならではの表情である。日本の限られた国土を思えば、地球上でもっとも多彩な自然に恵まれた国の一つと言えるだろう。この程度の広さで、これほど豊かな自然環境や生物の多様性を誇る国は、世界のどこを探しても見当たらない。日本人はこのかけがえのない財産を、誇りをもって世界にアピールすべきだと思う。

## 先人たちは里山を生かす名人だった

ぼくは日本の自然や野生生物の豊かさに驚かされどおしだったが、実はそれ以上に驚いたのが、この国の人々の暮しぶりだった。ぼくや外国人が抱いていたのは「工業国ニッポン」で、どこも都市化していて、皆製造業の会社や工場で働いていると思っていた。しかし全体を見ると「田舎」と呼ばれる地域が沢山あり、そこに暮らす人々は農

業、漁業、林業などで生計を立てている。しかもアメリカのような企業体ではなく、家族や地域が単位となって、先人たちの築いてきた自然を最大に活用する知恵と情熱を現代に継承している。

限られた自然を最大限活用するが、乱獲等で再生不能にすることはなかった。日本人は昔から森と水に特に敏感だったから、木を伐つて田畑にはしたが、最小限に押さえ、森は十分残してきた。そうした約束事が集落ごとにくく自然に確立されており、祭りや行事を通じて山や川、大地に宿る精霊を“神”とあがめて感謝を捧げ、また人々の連携を図ってきた。豊かで生産性に富む自然と、天然資源の徹底的かつ持続可能な活用に努めてきた日本人の生き方が相まって、美しい里山の風景が生まれたと言えるだろう。

ここ数年「里山」という言葉をよく耳にするようになったが、その意味となるとだいぶ混乱している。人によってニュアンスはまちまちだが、本来里山とは地方における伝統的な土地区分の一つであったとぼくは考えている。

大好きな作家の一人、椋鳩十の代表作の一つにイノシシを題材にした物語がある。宮崎と熊本、鹿児島県境に横たわる山々を猟師と共に歩き回った経緯をもとに書いた『山の民とイノシシ』という作品に、イノシシを仕留めた猟師が「まじない」を行う場面がある。

奥山に 三万三千三百三十三手  
中山に 三万三千三百三十三手  
里山に 三万三千三百三十三手  
合わせて 九万九千九百九十九手  
山のおん神に ささげまつる

（椋鳩十全集、25／ポプラ社）

ここでの「里山」は村と境を接する森や山で、村びとが毎日足を運ぶ日々の暮らしになくてはならない山林だが、一方で里山は雑木林のみならず、田圃、用水路、竹林、果樹園など村びとの暮らしに関わるいっさいが含まれるというのが一般的であ

る。その意味では、里山は日本のカントリーサイド・ランドスケープの別名と言えそう。カントリー：：に比べて「里山」は実に便利な言葉で、語感が洒落ており、詩情のある素敵な言葉である。

ぼくはよく「一番好きな場所はどこか」という質問を受ける。お気に入りの場所が多くて難しい質問だが、強いて答えるなら「溜め池」と言おう。子供の頃から小さな池のほとりで遊んできたので、溜め池はぼくの原点。たちまち日本へ来て溜め池に夢中になった。少年時代に戻ってガマを掴みカエルやカメを捕まえることが出来るし、貴重なイモリもいる。おまけに日本の池の真ん中には小さな島があつて水神様を祀るという特別ボーナスまで付いているのだから！

### カントリーサイドが危ない！

里山は知識と知恵の宝庫。何千年にわたって代々受け継がれてきた膨大な情報が蓄積され、人だけではなく野草や昆虫、鳥たちの住処ともなっている。

しかしいま、日本の里山をはじめ、世界のカントリーサイドが危機に瀕している。その理由は、あまりにも見なれた風景なので、あるのが当たり前、特別な場所だとは思わないこと。こうした意識や関心の低さから、カントリーサイドは急速に失われようとしている。都市の肥大化に影響する地区ではベッドタウンや大型ショッピングセンターへと姿を変え、反対に山間の過疎地などでは人口の減少と高齢化が進み、カントリーサイドの放棄が見られる。

農業の変化も伝統的な里山風景を喪失している。国際市場で競争しなければならぬ時代だからと、効率の悪い小さな畑や田圃は敬遠され、ピニールハウスとU字型コンクリート水路に代わった。農業の生産性は向上したが、一方で美しい風景は消え、多種多様な生物が息づく自然環境を奪い去る結果になっている。このままでは、懐かしい景色

とともに、この自然を土壌にしてきた日本独自の歴史や文化までもが永遠に失われてしまつた。

ここへきて世界の多くの国がカントリーサイドの重要性に気付き、その保護に積極的に取り組んだ。特にヨーロッパでは体験型の野外教育を教育制度の最重要課題と捉え、カントリーサイドの活用を積極的に行っている。日本でも「総合的な学習時間」の中に里山での体験学習を取り入れられるようになった。

里山は日本人の原風景、都市住民にとっても心を癒し、自然や様々な命にふれる絶好の場所である。しかし日本は交通機関がどこの国よりも発達しているのに、里山歩きをする人の姿が少くないという不思議な国だ。棚田や雑木林の保全等を手伝う市民グループも各地に誕生しているが、その数はまだ少なく、活動もまだ未熟である。

カントリーサイド・ランドスケープを守るのはたやすいことではない。原生自然林などに比べて、人が維持管理してきた生態系であるから、保全には人手が必要だが、里山の殆どが私有地であることも保全を難しくしている。保護の第一歩として国も国民もまずは里山の重要性を理解すること。日本では政治的レベルの保護策がないに等しいが、せめて地方自治体には広域行政の最優先課題として、環境保全型農業の育成や体験学習活動等に大急ぎ取り組んでいって欲しいと切望する。



ケビン・ショート氏 ナチュラリスト、東京情報大学環境情報学科教授。1949年ニューヨークに生まれ、1972年に来日。上智大学卒業後、アラスカ大学修士課程に学び、1991年スタンフォード大学より博士号を受ける。現在は印西市を中心に民俗植物学の研究に取り組み、自然観察会や講演会を通じて環境教育に当たる。地元のライター鈴木仁氏らと関東の里山保全や青少年野外体験学習活動にも取り組む。主な著書「ケビンの里山自然観察記」「東京ネイチャーウォッチング NATURE IN TOKYO」「里山ニッポン発見記」等。

# トキが大空へ翔ぶ日に向けて

生き物と共生する田んぼづくり（新潟県佐渡市新穂）  
にいぼ



の悪化で減少化がすすみ、20世紀後半には中国と日本の一部を除いて絶滅、現在野性のトキは中国陝西省洋県のみとなっている。

日本のトキは、明治時代に美しい羽毛を採るために乱獲されたが、昭和初期には、能登に5〜10羽、佐渡に60〜100羽、隠岐の島に数羽生息しているのが確認された。しかし戦後の森林伐採や開拓、農薬使用等で自然環境は悪化の一途を辿った。隠岐では昭和20年に絶滅、能登では最後の一羽が昭和45年に捕獲されて佐渡トキ保護センターへ。佐渡のトキも50年代に入ると10羽を割るまでになった。環境省は56年に捕獲し、トキ保護センターで飼育して繁殖を試みたが成功せず、雌のキンと雄のミドリを残すのみとなった。人々の望みも虚しく、平成7年にはミドリ、12年にはキンも死亡し、日本からトキが消えた。

一度は日本で絶滅したトキだが、中国が寄贈してくれたペアによりヒナたちは50羽を超えるまでに。トキ保護センターではトキの野生復帰計画が具体化、トキに熱い思いを寄せてきた農家の人たちは、野生でも生きていけるようにとドジョウやカエル、タニシなどの生き物が生息する田んぼづくりに取り組んでいる。これは「不耕起田」といわれる環境保全型農業。ここには自然や生き物が豊かな里山と、少年の瞳をした魅力的な人々がいた。

## 10年後、佐渡の里にトキが舞う?!

トキは特別天然記念物、国際保護鳥、そして環境省レッドデータブックの野生絶滅動物。20世紀初頭には中国、ロシア、朝鮮半島、台湾、日本と東アジア一帯に広く分布し、日本では江戸時代には函館から沖縄まで全国に生息していたという。しかし乱獲と生息環境

の悪化で減少化がすすみ、20世紀後半には中国と日本の一部を除いて絶滅、現在野性のトキは中国陝西省洋県のみとなっている。

日本のトキは、明治時代に美しい羽毛を採るために乱獲されたが、昭和初期には、能登に5〜10羽、佐渡に60〜100羽、隠岐の島に数羽生息しているのが確認された。しかし戦後の森林伐採や開拓、農薬使用等で自然環境は悪化の一途を辿った。隠岐では昭和20年に絶滅、能登では最後の一羽が昭和45年に捕獲されて佐渡トキ保護センターへ。佐渡のトキも50年代に入ると10羽を割るまでになった。環境省は56年に捕獲し、トキ保護センターで飼育して繁殖を試みたが成功せず、雌のキンと雄のミドリを残すのみとなった。人々の望みも虚しく、平成7年にはミドリ、12年にはキンも死亡し、日本からトキが消えた。

トキの餌場用につくられた田んぼ（生槽にて、高野毅さん）



ドジョウやタニシ等の水生生物が棲む泥田。  
「子供にはこうやって泥を畦に塗らせるのです」  
と高野毅さん



に移転、広い公園もある。

トキの野生復帰には、少なくとも60羽が生息できる自然環境づくりが必要で、そのためフィールドは佐渡島全域でも足りないといわれる。トキの群れが飛ぶ風景を再び取り戻したいという地域の人々の手で、柵田や草地の復興、ねぐらとなる大木のある森、不耕起田を拡大して生き物が生息する水田へ変換していくという活動が行われているが、個人の善意に担われている。昨年トキ交流会館が開館したのを機に、青少年やボランティアによる餌場や環境づくり学習会も高まり、都市住民の参加も求められている。

親から息子へ、トキに餌場を提供してきた高野さんの田んぼ

トキ保護活動の第一人者といえば故高野高治さん。幼い頃からトキと友だちのように接し、戦前戦後の食糧難の時も田んぼの一部でドジョウやタニシを育ててトキに餌場を提

供、センターにトキが保護されてからは山を超えて毎日ドジョウ等を届け高治さんだが、平成9年7月に84歳で死去された。その後は息子の毅さん(60)が父親の遺志を継いで、小動物が生息する田んぼづくりやトキが営巣できる森や草原づくりに精出している。いまは自宅も町中に移し、いちご等の集団栽培をする農業公社の指導者として勤務している毅さんは「トキの野生復帰連絡協議会」の座長としても多忙だが、生椿地区の田んぼに通って、水生動物や昆虫等のいる田んぼづくりを実践し、トキの野生復帰を準備している。

高野毅さんが生椿のその田へ案内してくれた。生椿地区は新穂の中心部から15km、標高350mの扇状台地。気温は平地より3度低く積雪も1・5mを超えるため、かつては9戸あった農家もすべて離村、最後まで居住した高野さん一家も高治さんの病気を機に町へ降りたという。

幹線道路から一歩入ると一面田んぼが広がる旧新穂村。佐渡は魚沼に続くコシヒカリの人気産地で、いまも稲作が盛んなところ。苗田が美しい集落を抜けて木々の茂る山道を登っていくと、いきなり太陽がふりそそぐおだやかな台地が現れた。日当たりのよい斜面にある柵田は2ha。家屋敷は朽ちてしまったが、田んぼは毅さんがきちんと耕作し続けている。田んぼの周りは広葉樹



の森。沢を流れる水の音が心地いい。

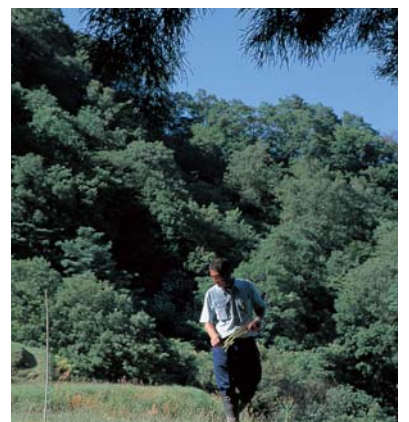
昭和10年頃までは沢山のトキがやってきたそう、毅さんは父親の高治さんから「11月頃には家の裏の田んぼで27羽のトキが餌を探っていた。あたり一面がボタンの花が咲いたように美しかったのう」という話をよく聞いたという。

「父は、トキが田んぼへ来るとお腹を空かせているのだから追っ払っちゃいかんと言って仕事の手を休めて見守り、田んぼには水を張りドジョウなどを飼育しました。昭和14年に出兵、21年に帰還するまでトキのことが心配で仕方なかったようでしたが、帰ってみると飛んでくるトキの数も回数も減っているのに愕然とし、23年には家の田んぼ3枚をトキの餌場に解放し、ドジョウやタニシ、サワガニ、カエルなどの飼育場になりました」

その後、養魚場から選別外幼魚を何千匹も購入して田んぼに放して飼育し冬の餌用にしたり、毅さんから子供たちも溜め池などで採った鯉や鮒を生かして持ち帰るなどして協力したという。

高治さんが田んぼを潰して作った餌場は家屋敷にも比較的近く、森にも近い一等地にあり、今も変わることなく毅さんに引き継がれている。最近の子供たちの体験学習の場として提供し、子供たちは大喜びで田んぼに入っ

モリアオガエルの卵とカエル(上)  
田を見回す高野さん



て泥んこになってカエルやドジョウを追いかけるのだという。

「泥んこ遊びは田の代掻きにもなるし、泥を両手ですくって畦に塗れば水濡れしないための手伝いにもなります。泥田は水張りが少ないとタヌキの運動場になっちゃうし、水が多すぎるとドジョウやタニシなどが育たないんですね」と高野さん。

佐渡には里山に出没して問題になるイノシシ、シカ、サル、それにキツネ、クマは生息しておらず、タヌキとテン、野うさぎ、野鳥が多いと聞いて驚いたが、田んぼ道を歩いていると、野鳥のけたたましいさえずりに似た声が聞こえてきた。「あれはモリアオガエルの雄です」と聞いてまたびっくり。貴重種で、普段見ることが不可能なモリアオガエルだが、ここでは田んぼの脇に生えている木から産卵した白っぽい卵泡が、田の中に沢山浮かんでいる。田の周辺にはいろいろの種類のカエルたちが跳ねていたが、モリアオガエルの雄も美しい深緑色をして苗の中を悠然と泳いでいた。

標高の高い土地だが、稲は里と変わることなく根を張ってしっかり育っている。冬期の湛水が水生動物や微生物を育て、それが豊かな有機質の土壌となる。水は沢の水だから冷たいが、蛇行した水路で温めてゆっくり田に入り、一枚の田が一杯になると次の田に流れ込み、また次の田に注ぐという工夫が施してある。水見のために毎日来る必要はないようだ。「稲を刈り取ったあとの田に湛水しておくとしりなどが生えます。それをカモが根からきれいに食べていきます。農薬や化学肥料を使わなくても、自然と生き物が共生しあつてそれなりに安全で美味しいお米を作ってくれるんです」と高野さんは言う。

### 山麓は昆虫王国 池や水生植物を整備

一段高い森の入口に近い場所へ行くと水生植物の群落や池があった。かつては高野家の従兄弟の田んぼだったが、耕作を止めたため、いまは穀さんが池に変えて昆虫や水生植物の住処にしている。近くに雑木林から切り出した木材や切り株などが積み上げてある。「廃材置場ではないんです。こうしておくで昆虫やミミズなどの住処になるので、野鳥の絶好の餌場になるんです」

水草に止まるイトトンボやシオカラトンボに感動していると、間もなくオニヤンマが池の上に現れた。ここはホタルとトンボの楽園でもあるのだ。

「山菜も豊富ですよ。ここに生えているものは殆ど美味しく食用できるんだけど、最近では田舎の人もたらの芽やワラビ位しか知らなくなつた。身近な場所にこんなにも豊かな自然と沢山の恵みがあるということをまず地元の人に知って欲しいですね」と高野さんは言われた。山菜の取り方や食べ方について教えてくれた。

月のうち20日間は農業公社で働いて、10日間は生槽で稲作をするという高野さんだが、ここでは少年に返つて遊んで過ごすという感じがピッタリだ。私たちも何時になく楽しい至福の時間を過ごさせていただいたが、トキも大いに気に入つてここを住処にするはずだ。

高野さんは佐渡から野性のトキが絶滅したことについて「トキがいなくなったのは農薬のせいといいますが、農薬以前から数が減つていました。トキはヒナ育ての頃に田んぼに入つて荒らすといつて山間部の農家は嫌つていました。そんな農家も後継者がいなくなつたり働きに出たりして、圃場整備し機械化し



池と水生植物、そして昆虫用に木材を配したエリア  
トキ交流会館。里山作業グッズを手に金子主任

ていった。トキの餌場が少なくなり体力がなくなつたところへ、さらに農薬や化学肥料が追い討ちをかけたんです。父は昭和34年にトキの保護活動には生態の実績調査が必要だと、集落の人に協力してもらい1年間かけてねぐら調査をしました。新穂村から県に提出され、38年には県からの要請で冬期間の生態調査をしました。当時から絶滅の危機を訴えながら、個人ではどうすることもできない、そういう時代だったんです。後年「トキだけを見ておればよいというものではない。佐渡という風土があり、人がおり、トキがいたということだ」といった父の言葉が印象的です」と語る。

効率最優先の「そういう時代」を変えることができるのか。父親の遺志を継いだ穀さんの挑戦が続く。

### 水生生物の棲む稲田づくり 環境保全型農業「不耕起田」

翌朝「佐渡トキの田んぼを守る会」会長で、不耕起田を手がける斉藤真一郎さん(40)と待ち合わせるためにトキ交流会館へ出かけ

た。  
トキ交流会館は、トキの野生復帰を願つて、







トキがよく飛来した田んぼはいま不耕起田に。  
斉藤さんの足元、田の畦に沿って水生生物用の池を設けている

人とトキが共存できる自然環境や地域づくりを推進するための拠点施設として佐渡市が昨年10月にオープンしたもので、元ホテルだった建物の利点を生かして、宿泊(15室)、研修、資料展示場等が完備、裏手の山林では里山保全の体験実習を行っている。高野さんの田んぼで子供たちが体験学習したり里山保全のボランティア活動も同会館が窓口になっている。主任の金子恵久さんは元新穂村職員でドジョウの人工孵化を成功させた人。

「トキの野生復帰には地域住民の協力が欠かせませんが、ここ潟上では20数名のボランティアグループが出来て、青少年の研修活動等を支えてくれています」と語る。

山仕事用の長靴やスコップ、虫採り網等も100人以上以上完備、専門的な資料も閲覧できる。

午前9時、斉藤さんが迎えに来てくれて早速新穂田野沢地区の不耕起田へ案内してくれた。周辺には鬱蒼とした雑木林があり、近い将来この一角にトキが野生復帰するための訓練所が出来る予定の場所で、2年前からここで山本雅晴さんが不耕起田を耕作している。

不耕起田とは、いま最も注目すべき環境保全型稲作で、稲刈りを終えた田に水を張っておき水生動物等の住処にしておくというもの。翌春田植えする時と稲刈りの時には水を抜くので、田んぼの脇に水生動物たちが避難できる深い水たまりが作られている。いま佐渡では18名の農家が12haの不耕起田づくりに挑戦している。

「ここでは田起こししないので昨年の株が残っています。トロトロ層が5cmほど出来ているので水生動物が元気に育ち、微生物もいっぱいいますから、土壌は豊かで、雑草も生えませんが、肥料の代わりにモミ殻や糠を少し蒔くだけです」と斉藤さん。

田植えを終えた田には青藻サヤマド口が生え、タニシやイトミミズ、ヤマトシジミなどが生息している。田の畦に近い場所に設けた避難場所には、ドジョウが次々と顔をだし、メダカが数十匹で群をやって泳いでいる。

今年6月に県の専門家が行った調査では、この田の水生生物の量は低農薬による有機栽培水田よりもはるかに多く、イトミミズでは一般に20万匹だがここでは506万匹、ユスリカが2万匹に対して147万匹、ミジンコが2〜3万匹に対して120万匹(10aあたり)だった。他にもカエル、ヤゴ、メダカ、甲虫の幼虫など種類が多い。そんなせいか田の周辺には沢山のツバメが飛来、あらゆる種類の野鳥が見られるという。



気になるのがお米の収穫量だが。

「普通の田では1反歩7〜8俵取れますが、不耕起田では6俵位。味は変わらず、農薬代や肥料代ゼロ、手間もかからないのが魅力です。今後もっと多くの農家に普及していくためには、不耕起無農薬トキヒカリ米として都市の人たちに直販し、トキの野生復帰を支援していただければと思っています。」

トキは一日200gの生きた餌が必要で、60羽が野生で生きていくためには、このような水田が500ha必要なんです。今は今後耕作予定の農家を入れても1割しかありません。さらに、トキは慎重で警戒心の強い鳥です。から餌場とともに林や止まるための高い樹も必要です」と斉藤さんは言う。

佐渡島でも松枯れが深刻で、特に樹齢の進んだ高い松が枯れている。課題は多いが、斉藤さんのような若い農業担い手に期待したい。

(文/浅井登美子 カメラ/小林 恵)

・トキ保護活動や不耕起田の問い合わせは「トキ交流会館」へ。  
☎952-0103 佐渡市新穂潟上1101-1  
☎0259-24-6040  
<http://www.toki-house.jp>

上左/タニシなどの小動物がいっぱいの不耕起田  
上右/青藻は酸素を出して水をきれいにし、雑草の生えるのを防ぐ  
下/去年の稲株が残る不耕起田に立つ斉藤真一郎さん。田植えでは苗を2株ずつしか植えないが(普通は4、5株)7月頃には根を張り足腰の強い成苗になるという



北上川河口に約10kmにわたって広がる葦原。毎年秋に刈り取るので、春には新芽を出した葦が河川敷きを新緑に彩る。葦原にはウナギ、シジミ、ワカサギ、スズキなどの魚介類が豊富に棲み、「大粒で臭みがない」と人気のシジミ漁も6月から解禁した。日本で唯一茅葺き民家用の素材を全国に提供する(有)熊谷産業は、葦の和紙、堆肥づくり等、葦の素晴らしさを100%活用した商品開発を行っている。

日本画を見るように美しい風景だ。いつの間にか各地から姿を消してしまった葦原だがこれだけ壮大できれいな葦原を見たことがない。新芽が萌え出る春、秋の黄金色、冬の白黒のモノトーンの世界と、四季折々にその姿を変えながら、さまざまな恵みを提供してくれるのだらうと想像しながらクルマを走らせた。

葦原は河口から約10kmにわたって広がり、現在その大部分を(有)熊谷産業が管理・手入れし、刈り取って茅葺き屋根の材料やよしすなどに加工しているという。

熊谷産業は、葦原が茂る河川の、堤防をはさんだ左手の一角にあった。立派な家屋敷が並ぶ地区で、家の裏手には水田が広がっている。敷地内の手前に葦を収納する倉庫や作業

生き物が豊かに暮らす自然郷——2

## 水生生物と伝統素材の宝庫 北上川河口の葦原と共に

(宮城県北上町)  
きたかみまち

葦の採取と加工は昔から農家の冬の副業だった

東北一の大河・北上川は、河口の北上町あたりで海のように広がり、両岸には新緑の葦原が初夏の日ざしと緑風の中で心地よさそうにそよいでいる。ここでは川の流れも穏やかで、小舟が葦原の中の水路をゆっくり滑るように行く。葦の中では野鳥や水鳥たちが忙しく飛び交い、それらの風景を土手の枯木に止まったイヌワシが悠然と見下ろしている。

場があり、その奥に茅葺き民家。それが熊谷さんの家だった。庭先にはサツキや松等の盆栽、手入れされた樹木がところ狭しと並んでいる。

「ちょっと指を切ってしまった」と言いながら社長の熊谷貞好さん(70)が現れた。「昭和30年代に河川改修するまでは、いま葦原になっているところが田んぼで、田んぼのところは葦原だった。本流が向こう(河北町)へ移動したので、こちらはシジミなどの漁が減り葦原も少なくなりました。この辺りは農業と漁をし、冬は葦を刈って茅葺きの葺き

替え用にする仕事を副業にし、7、8軒が商売にしていたんですが、いつの間にか茅葺き民家が消えてしまい、いま3軒になりました。我が家も廃業の危機に立たされましたが、Uターンした息子が『かけがえのない文化を産業としてきちんと守ろう』というので、会社を興したんです」

その息子が三男の秋雄さん<sup>39</sup>。常務として葦の採取から加工、和紙や肥料、その他の利用で付加価値をつけるための研究開発に当たっている。青年海外協力隊でフィリピンに農業指導員として3年間行った。帰国後は「日本はなぜ海外から何でも輸入するのか、自然環境や伝統産業の保全につながることを若い人とやりたい」と、葦原を守り、それを活用していく仕事を決意したという。

一方、茅葺き民家は保存したいが、材料の茅や葦が手に入らない上に茅葺き職人もいないという地区や神社等のために、長男の雄さんが葺き替えや古民家再生の建築技術を取得、職人として全国を飛び回っているという。

父親貞好さんの、葦へのこだわりと広い知識、高い技術力が息子や人々を惹き付けるのだらう。(有)熊谷産業は10年前に設立、赤字覚悟のスタートだったが、関心を持つ若者や葦の加工経験を持つ地元の人たちの協力もあって、平均20人が社員またはパートで働く企業へと成長した。

湿原での葦の刈り入れや運搬には、外国製の特種機械(タイヤが大変大きい)を導入しているが、やはり人手が不可欠で、里山や葦原を保全するボランティアも参加して40人以上が作業する。北上川の秋のイベントとして賑わい、見物する人も多いとか。しかし高さ2〜3m、長いものは3.5mにも伸びる葦の刈り取りは重労働、保存と加工にも手間ひま広い場所が必要だ。それだけに貴重な葦で、と



茅葺き屋根用に整理・裁断する作業  
裁断後の葦は粉末にして腐葉土や堆肥にする



葦原でシジミ漁をする人たち。町長の息子さんや熊谷社長の奥さんも参加して大粒なものを選別する  
熊谷さん親子が子供たちにと葦で作った鯨の船



よりすぐった葦は簾に。社長の貞好さん(左)と腐葉土を手に入れた秋雄さん(右)



くに潮にもまれて育ったこの葦は形がよく丈夫だと人気が高い。

葦原は高級シジミや魚の住処  
和紙や腐葉土にも最適

夕方、シジミ漁を終えた船が帰ってきた。漁業協同組合員である5軒が、家族も協力して大粒で実の確かなものだけをていねいに選別する。漁は6月から10月まで、午前と午後潮の満ち曳きに合わせて2時間程度と限定している。

「この葦原で採れたシジミは大粒で味がいいので高級品なんです。昔は大型船で大量に採ったので、シジミ漁で食べていけないだけ、川の流れが向こう岸に移り原産も出来たので、いまは小遣い程度にしかありません」



河北町側の河口とシジミ漁  
イヌワシの姿を身近に見ることができる河川敷き

と組合長の今野勝重郎さん(80)は言う。その夜宿泊した「追分温泉」で、大粒だからこそ可能なシジミのつくだ煮と味噌汁をこ馳走になったが、評判どおり本当に美味しかった。

葦原にはカニ、ウナギ、ススキなど沢山の魚が棲み、他に、春の葦は家畜の餌に、夏は海苔を干す海苔簾にも利用されてきた。

葦原と同社の加工場を熊谷社長に案内してもらった。一般の人が葦にふられるようにと板張りの遊歩道が出来、水辺には熊谷さんたちが昨年製作したという葦で編んだ鯨のかわたちをした船があった。熊谷さん親子は子供たちに葦原の素晴らしさや楽しさを体験してもらおう機会を出るだけ多く持ちたいと考えており、船は「子供たちが大喜びしたから、



谷さん。熊谷家は、水田も20枚ほど作る大規模農家で、葦の粉末や堆肥を土に入れて有機米づくりをおこなっている。町内には収穫した葦を長さに応じて保管する倉庫が幾つかあった。扉を開けると、干し草に似たいい匂いがする。茅葺き材料として加工する場合は、カッティングしたあと先端部分をクルマで曳いて口を潰し、雨水の侵入を防ぐのだという。都市から移住してきて同社で働く若夫婦の家へ行くと、葦の和紙で造った粋なスタンドが幾つかあった。風こそよく葦を生活に取り入れるアイデアは見事、多いに期待したい。

(文/浅井登美子 カメラ/小林恵)

今年も造らなくちゃあ」と言う。「葦はイネ科の多年草で、捨てる場所は何もありません。専門家に漉いてもらった葦の和紙は室内装飾用にびったりで、葦という天然素材の枕や簾の商品化、腐葉土づくりも始めています。粉末を農作物に与えるだけでも効果ありますよ」と熊

宿泊した「追分温泉」横山館主自らが美味しい素材を探してきて調理に腕をふるうので料理が上手いと評判。手頃な価格も受けて、関東からやってくる客も多い。☎0225-67-3209

・(有)熊谷産業 ☎0225-67-2045

# 日本ミツバチを守る 八子追い人の里

(長野県中川村)  
なががわむら

上から巣作りをする日本ミツバチ / スズメバチが日本ミツバチを捕えて肉団子にしている / 富永さんと仲間たちが製造している蜂蜜・資料



「望岳荘」内にある八子博物館。キイロスズメバチの巨大な巣について説明する小川係員

4mを超える巨大な蜂の巣。豊半量もあるうかと思われる球形の蜂の巣。世界最長、最大の蜂の巣が並ぶ「八子博物館」が、村のシンボルとなった長野県中川村南向<sup>みなかた</sup>。山国の貴重なタンパク源として、古くからこの地に根付いた蜂追いの伝統や日本ミツバチの保全は、蜂を愛してやまない富永さんから村人たちによって、山あいの村に活力を与えている。

## そこいらじゅうにあった地蜂の巣

腰をかがめた富永朝和64さんの目の先で、大きなスズメバチが日本ミツバチを一瞬の間に捕らえた。

「ほうれ、よく見て。今度はその枝まで飛んでいって、ミツバチをすぐに肉団子にしますよ」「それから真つすぐに自分の巣に運

んで行ってね、蜂の子に与えるんです。この肉団子を」

スズメバチは近くの草むらに飛んでいき、富永さんの言った通りに小さなミツバチを団子状に丸め、飛んでいった。

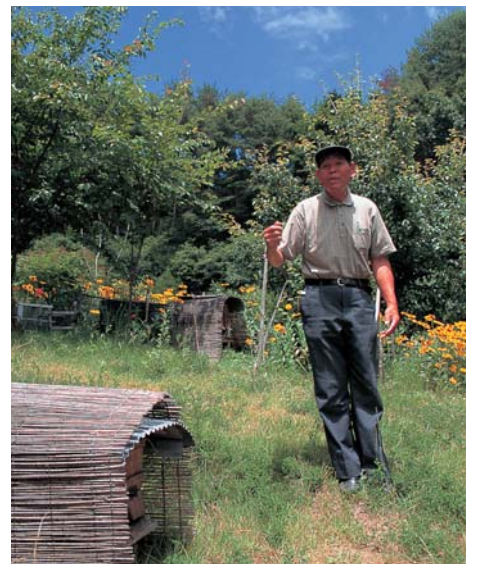
日本ミツバチが羽音をたててブンブン飛び交う日盛りの斜面。朽ち果てたような木の洞や、古い樽が数ヶ所に置かれているこの場所で、蜂の研究家であり「信州日本みつばちの会」会長の富永さんは、減少しているという日本ミツバチの繁殖に取り組んでいる。

天竜川を挟んで、変化に富んだ段丘が広がる長野県上伊那郡中川村。海が遠いこの地域に古くから根付いた蜂追いの風習は、蜂蜜や貴重なタンパク源としての蜂の子の確保に欠かせないものとして受け継がれてきた。

山を背にした南向<sup>みなかた</sup>地区のこの場所は、風がなく、日の出から昼までの強い日差しが必要という日本ミツバチの好む最適な場所。こうした場所を探しては、富永さんはミツバチに気に入ってもらえそうな巣箱を設置する。

小学生の頃から父親に倣って蜂を追っていたという富永さんにとって、蜂は常に身近な生きものであり、食糧だったという。野山を駆け回って「すがれ」と呼ばれる地蜂(クロスズメバチ)を追い、庭ですがれを飼うほど、この辺りの子供たちはみな蜂が好きだった。

日本ミツバチの巣箱が並ぶ畑で、富永朝和さん





日本ミツバチの好む巣箱の研究にも長い年月がかかったと富永さん

「カエルの皮をむいてね、棒に刺して待っていると、稲穂の上あたりに蜂がどんどんやってくる。蜂は利口だから餌をもらった場所を覚えていて、なんでも飛んでくるんです。その餌に綿をつけ、綿をくわえた蜂を追っては、巣を見つけるわけです」

棚田や林が今よりもずっと多かった昔、すがれはそこいらじゅうを飛んでいて、蜂の巣も多かった。蜂の巣を探ることは、子供にとっては勲章のようなものだったと富永さんは笑う。今ではタンパク源も多様化し、蜂の子は郷土産品として珍重されるようになったが、蜂の子ご飯など今でもその味を愛する人は多い。

### 激減する日本ミツバチ

蜂蜜は万人に親しまれ健康食品としても広く普及してきたが、私たちが通常入手している蜂蜜の殆どは、西洋ミツバチが採取したものだ。養蜂のために改良された西洋ミツバチは、人間が飼いやすく、季節毎に咲くどんな花の蜜でも吸ってくる。養蜂家の作った巣箱にも簡単に入ってくる。何とも扱いやすい蜂なのだが、富永さんに言わせると、「人間に飼われなければ生きてはいけないように、改良されてしまった蜂なんです」ということになる。

その富永さんがこだわるのは、西洋ミツバチとは全くの対極にある日本ミツバチだ。今では激減しているといわれる貴重な種だが、在来の日本ミツバチは人間にはなつかず、山里でのみ棲息するという野生児だ。

体長も西洋ミツバチよりひとまわり小さく、気難しい。あくまでも自分流の巣を好み、人間の作った巣箱などには簡単に入ってくれない。巣の入口をちよつと開けただけでも羽音をたててざわめくし、かたまりになって移動してしまう。富永さんのこだわりは、その野性味溢れる日本古来の蜂たちなのだ。

体が小さい分、集めてくる蜜の量は少ない。しかも西洋ミツバチのよつにどんな花でもというわけにもいかない。山に咲くフジヤコブシ、そして在来のソバや小さな山野草の花。そうした限られた花のみが、彼らの蜜源となる。

「花は咲きはじめがいちばんいい蜜を出すんです。洋バチは体が大きいから、咲きはじめの花には入れない。日本ミツバチはそこをこじあけて入っていく、いちばんいい蜜を採ってくるんです」と、富永さん。

その栄養価は西洋ミツバチとは比べものに

ならないほど高く、蜜の成分にはローヤルゼリーもプロポリスも含まれる。しかし、アカシアなどを吸った西洋バチが、月に2、3回蜜を絞れるのに対して、日本ミツバチの蜜は2、3年に一度という少なさだ。約3000回の飛行で、やっとスプーン一杯分の蜜を集めてくる。(ちなみに西洋ミツバチでは四分の一ほどの回数)。その蜜がどれほど貴重なものは、いうまでもないだろう。

### 巣別れが貴重なチャンス

近代養蜂には適さないといわれてきた神経質でやっかいな日本ミツバチ。しかしその野性味を愛するがゆえに、富永さんは日本ミツバチと向き合う。人間にはなつかないという彼らの巣を、富永さんはどうやって増やしていくのだろうか。

それは蜂の群れが大きくなって巣別れをする「分蜂」の時が、チャンスとなる。新しい女王蜂の誕生と入れ替わりに、それまでの女王蜂が半数の働き蜂や雄蜂を引き連れて巣を出る分蜂は、毎年4月15日から6月の間に行なわれる。風のない天気の良い日に、あらかじめ見つけておいた神社の古木の洞などをめがけて、2、3万匹が真っ黒な塊になって飛んでいくという。

この時、巣から出た群れは最初にある近くの木に大きな球状のまま一旦停まる。その木の下に空の巣箱を持っていき、蜂の群れを落として入れる。

「群れの外側にいる蜂の羽根を霧吹きスプレーで濡らすと、羽根がしまつて小さくなる。巣箱に入れやすくなるんです」

ファールのような観察眼で富永さんは蜂の行動を凝視する。そこから独自の創意工夫がどれ程生まれてきただろう。特に、巣箱作りには試行錯誤を繰り返した。古くなった漬



物桶を使ってみたり、ダンボール箱で試したり。結局彼らが好むのは杉やさわら、松の古木などで、枯れて穴が開いたものなどはお気に入りということが分かってきた。

「巣箱作りがいちばんへたなのは、大工さんと建具屋さんだね。ご丁寧にカンナなんかかけちゃってね」と、富永さんは可笑しそうに笑う。

こうして富永さんのもとでは新しい日本ミツバチの巣が、年々数を増やしてきた。

### 村のシンボル「八手博物館」

中川村の丘陵には、林檎や梨の花が季節ごとに咲き広がる。果樹の里としても知られる地方で、蜂たちは果樹の受粉という大事な役割も担っている。蜂と人が見事に共存する村、中川村はまさにそんな村だ。

赤石山脈の山麓・南向地区の中央部に、平成7年「八手博物館」が開館した。展示されているのは富永さん制作による世界最大のスズメバチの巣。オリンピックランナーの形をした巣など、50点ほどのユニークな作品は、造形の面白さ、意表をつく大きさ、どれをとっても富永さんと蜂たちとのただならぬ努力と、執念に圧倒される。

世界最大といわれる巨大な球形のスズメバチの巣は、胴まわり6・6m。同じスズメバチの長さ4・1mの巣も、世界最長。長さ4・1mのこの巣は、キイロスズメバチの29個の巣を合体させたものだ。富永さんは繫げた巣を吊すコナラの大木を用意し、曲がった幹の先に長い鉄芯を繫げ、そこに29個の巣を串刺しにしていくことを考えた。

なんとも奇想天外な、しかも無謀とも思える発想ではないかと、誰もが思った。相手はひと刺しで死の危険性のあるキイロスズメバチである。それが約20万匹。しかし富永さんは周到にすべてを準備し、防護服で身を固めた9人の男たちとともに、それをやり遂げた。その勇氣、気力、氣迫。息をのむドラマが、館内に並んだギネス級の蜂の巣にはいくつも隠されているのだ。

「八手博物館」は蜂と村人との深い関わりを象徴するとともに、「八手の中川村」の知名度を大きく上げる役割を果たしてきた。

### 赤ソバの花が実る日

富永さんから「信州日本みつばちの会」で注目されているのが、ポリフェノールが大量に含まれるという赤ソバの蜂蜜。数年前に信州大農学部井上直人教授らによって発表された研究では、国内各地のソバ蜂蜜とアカシアや林檎などの蜂蜜を調べた結果、ソバ蜂蜜に活性酸素を抑制する力が圧倒的に高いことが分かった。

特に日本ミツバチが集めた「高嶺ルビー」という赤ソバの蜜が、普通の蜂蜜に比べて200倍近い活性酸素抑制力をもっているという点に、注目が集まった。ガンや動脈硬化、心筋梗塞などの原因になるといわれる活性酸素を、大幅に減少させるポリフェノールが、この赤ソバの蜜には含まれているという。

「高嶺ルビー」はヒマラヤ産の赤い花をつけるソバが原種。この種を信州大と地元企業「タカノ」が、ネパール北部ヒマラヤ山麓から持ち帰り、共同開発した。

「30年前にこの種を持ち帰り、試験栽培を始めましたが、環境が違つたため花が赤くならず、改良を繰り返しました。その結果、標高の高い寒冷地でのみ赤い花をつける品種の栽培



上/宿泊、交流施設「望岳荘」(ぼうがくそう)  
下/打合せ会を開く「信州日本みつばちの会」  
富永さん手作りのスズメバチの巣箱コレクション

に、やっと成功したというわけです」

とタカノの北林広巳さんは話す。タカノではこの「高嶺ルビー」を品種登録し、富永さんが会長を務める「信州日本みつばちの会」に栽培を依頼、日本ミツバチの集めた蜂蜜を商品化し、発売していく計画だ。

今のところこの「高嶺ルビー」を栽培できるのは「信州日本みつばちの会」だけ。

「在来のソバとの自然交雑から守るためにも、今の段階では栽培を限定せざるを得ないので

す」と、北林さん。日本固有の在来種日本ミツバチが出会った新しい蜜源「高嶺ルビー」。山間のソバ畑に赤い花が咲く頃、ソバ畑を飛び交う日本ミツバチの姿が、中川村の新しい風景になっていくことを、富永さんも北林さんも願っている。

(文/金山淑子 カメラ/小林 恵)



・八手博物館(望岳荘)  
☎0265-88-2033



# 奥薩摩の水と緑の郷

## 川内川の「ホタル舟」

(鹿児島県鶴田町)  
つるたちょう



40分間の  
幻想的な  
川下り

乗船口係のボランティアに「いつらつしゃーい」と送られて、ドラゴンボート2艘をベルトでつなぎ合わせた「ホタル舟」は、5分おきに次々と岸辺を離れた。船首と船尾に長さ5m

地元の船頭さんだけが知っていた川内川流域のホタルの乱舞。その地域の宝が、地元ボランティアによって「奥薩摩のホタル舟」として活かされた。初年度は約1000人、翌年には2236人が訪れて、普段はダムと温泉の静かな町が、初夏になると「ホタル舟」で活気に溢れている。町民が力を合わせて「ホタル舟」に取り組む鹿児島県薩摩郡鶴田町を訪ねた。

ほどの竹棹を持った船頭さんが一人ずつ。誰に言うともなく「行ってきまーす」と、はしやいだのはつかの間、簡易桟橋を離れると、あたりは流れる水の気配がするだけで、すでに闇。シンとした緊張感と静寂が舟を包む。「ホタル舟」は、鶴田町所有のドラゴンボートを繋いだ舟7艘と今年新造した専用船3艘が順に出発する。

闇の中で、ヒチャと船頭さんの持つ竹棹が、水面に触れる音がした。その時、ライフジャケットを身につけた乗客18人の誰からもなく「おーっ」と、感嘆の声が上がった。竹ヤ



ブになっている右手の岸辺に、ホテルの光が壁のように立ち上がった面となって、ふわふわと一斉に点滅している。舟の流れに合わせて淡い光りのウェーブが追いかけてくる感じだ。「ホテル舟」の運行距離は2キロ、約40分間の川下りである。途中、所々で闇の中にほのかな人の気配がする。救護班ボランティアが万一に備えて待機しているのだ。下船場に近い神子橋あたりになると兩岸に民家もあるが、舟の運航時間に合わせて午後8時から9時30分ごろまで、家の明かりを全て消して、テレビも見ずに協力していると、船頭の中園昭生さん(62)が説明してくれた。

鹿児島市から車で1時間30分かけて来ていた3人の家族は、「土日曜は予約が一杯だったので、仕事は休みをもらって。娘が宿題を終わらせて、4時半ごろ出発して」

「岸辺で見ると全然違いました。ホテルと同じ目の高さになって、幻想的でした」

同じく鹿児島市内から来ていたカラオケグループの6人は、鶴田町の観光拠点となっている集合場所の「あびる館」で温泉をゆっくり楽しんでから舟に乗ったそうだ。「あんなきれいな非日常を体験したのだから、繋いだ舟の間から水が上がってきて服が濡れたけど、あれ位許せるわよね」と、すっかり満足していた。駐車場には、富山や京都ナンバーの車も止めてある。旭川から来ていた老夫婦は、隣接する大口市に住む息子夫妻の招待だと話してくれた。「奥薩摩のホテル舟」は、遠くまで評判が届いているようだ。

### 地元ボランティアが全面協力

「奥薩摩のホテル舟」を運行しているのは、地元ボランティア110人で組織されている「奥薩摩のホテルを守る会」である。「安全面を一番に考えていますからね。どうしてもス

タッフの数がいるんですよ」と、会長の上大迫重規さん(63)。人口5000人足らずの町で「ホテル舟」を運行するのは大変。それでも「一泊してホテルを見るとお客が増えましたね、今年は」と年々増える予約客に手応えを感じている。

「今年の進歩は、くぐり竹燈籠。会員が仕事を終えてから、夜9時過ぎまでかかって作ってくれました。相手がホテルさんでしょう。派手にはしたくないんですよ。素朴で静かに見られるようにしていきたいですね」と、スタッフの配慮と熱意に感激の様子だ。

「ホテル舟」の話しが持ち上がった時、最後まで反対したのは船頭たちだった。田淵政春さん(71)は、鹿児島市内の大手メーカーに勤めていたが、定年後帰郷して川舟で釣り三昧の日々を過ごしてきた。「とんでもないことをしてくれるなど、最後まで反対したんですよ。無灯火で川を下らないかん訳ですよ。私なんかは、川底の構造を知っているから問題ないですよ。しかし、すぐに誰でもができることではないですよ」

しかし、やるとなったら先頭に立って協力したのも船頭たちであった。「ホテルがよけ(沢山)あるちゅうことは、



地元の船頭は良く知っておったわけですから、それを遠くからのお客さんに喜んでもらえるのは、元気がでますね。舟を操るのに難しいのは、棹を静かに扱うことでしょうね。私が乗っておれば、棹がチャポンともいいませんよ」と、自慢げだ。

家の明かりを消して「ホテル舟」に協力してくれていると、船頭さんが話していた川岸の家を訪ねた。「ホテルの季節が始まる前は、少し憂鬱だなあと考えてしまうのですが、始まってしまえば苦にはなりません。普段しないことがで

左列上から / 上大迫重規さん(63) 船頭の田淵政春さん(71) 白川田唱子さん(44) 左後に見えるのが自宅

上から / 夕方5時すぎから、乗船口では準備が始まる / 今年新しく登場したくぐり竹燈籠を抜けて乗船場へ / 「いってきまーす」と闇の中へ出発するホテル舟

上/今年新しく登場したくぐり竹灯籠  
下/開通したばかりの天狗山トンネルに  
は、ホタル舟がシンボルとなっている  
受付前でホタルについて説明する元職員



きますし」  
庭先が川  
内川に面し  
ている白川  
田唱子さん  
(44)は、自  
らも、毎日  
ではないが、  
乗船誘導の  
ボランティア  
アに出かけ

「自然と親しむタイプではない主人ですが、この時期は、真っ暗な家の外に出て船頭さんに声を掛けたりしているのを見ると、楽しいのかなと思います。ホタルの季節が特別な期間になっていきますよね。今まで全然脚光を浴びてなかった田舎の町なのに。友だちや親戚もこの時期に来てくれるようになりました」  
ホタルを地域の宝に  
「奥薩摩のホタル舟」は、鹿児島県総合計画

「役場のためという気になれればいい。民間が中心になってやらなければ」とは言うものの、町行政が手をこまねているのではない。町職員も率先してボランティアに参加するし、「奥薩摩のホタルを守る会」に対し、補助金として事業総予算の26・4%に当たる104万円を援助している。「最終的には関連する地場産業の経済効果を期待していますが、現在のところは経済効果と言うより、乗船されたお客様の喜ぶ声が地元のエネルギーになっています」  
楠木園課長は、イベントだけでなく、「ホタルを地域の宝」とするために「天然記念物の指定を目指している」と、期待を込めて語った。そのための布石として、地元の小学生27人を「ホタル情報員」に任命し、ホタルの生育情報を寄せてもらっている。そのひとり鶴田小5年生の片岡祐太郎くんを訪ねた。  
「ほとんど毎日、担当のポイント7へお父さんと車で。いつも同じ時間じゃないと正確な記録にならないので、宿題を済ませて、午後7時50分から8時5分の間に観察します。こ

の「個性豊かな美しい観光地づくり」の主要プロジェクトとして始められた「奥薩摩・水とみどりの郷づくり推進」事業だ。日本初の「ホタル舟運航」として知られる山口県豊田町の例を参考に発案したが、「行政が指導している訳ではない」と、鶴田町企画開発課の楠木園建雄課長52は強調する。



飯は帰ってから」  
「いつものポイントにホタルが居なかったら、その先の急斜面のところへ行ってみたらたくさん居た。ほくはちょっと考えてみた。明るいとところはメスの光が見えにくくオスに発見されないの、メスは場所を移動して、オスと一緒に移動したのだと思う。昨日は、今年最高の23匹だった」  
5月17日のことだ。毎日の観察がホタルへの関心も呼び起こしているようである。観察は7月上旬まで続けられる予定だ。  
平成の大合併は、鶴田町でも進められていく。隣接する宮之城町と薩摩町の3町が合併し、平成17年3月に「さつま町」として27000人の町政がスタートする。今年2月には、ホタルで地域振興を図る全国の市町村担当者会議「ホタルシエルバ会議」を鶴田町で開催するなど、「さつま町」となっても「ホタルで売り出していける」と、楠木園課長は自信を深めている。  
町民の熱意と努力、それと遠来の客の喜ぶ声に支えられて三年目の山を乗り切った今、地域おこしイベント「奥薩摩のホタル舟運航」だけでなく、次の目標として「天然記念物の指定」を得るための活動が始まっている。

(文・カメラ/芥川 仁)

・鶴田町企画開発課 ☎0996-59-3111

・あび～る館 ☎0996-59-3911

上/片岡祐太郎くん(小5)  
下/楠木園建雄課長(52)



# 耕して天に至る石垣段々畑

くらはしちやう かしま  
広島県倉橋町 鹿島

先人の遺産を未来へ—— 1

鹿島は瀬戸内海・倉橋町の南端にあり、江戸時代には「潮待ち風待ち港」として栄えた鹿老渡かろうとの沖に浮かぶ周囲9・3km、標高230mの平地の少ない島。現在は鹿島大橋がかり、本土から車で行けるようになった。島の西南、宮ノ口集落に「耕して天に至る」の言葉通りの石積み段々畑がある。

江戸時代後期から明治にかけて移り住んできた先人たちが、山から出る石や礫の石を「負い子」で運び上げて組み上げ、食糧確保のための耕地を作ってきた。肥沃とは言えない花崗岩土壌だが、戦後はさつまいもや麦、みかん栽培の適地として耕作されてきた。

近年は島の人たちの労働形態が変わり、畑の休耕期には雨水被害や雑草防止用にマルチシートで覆っておくことが多くなった。島民の多くは、春からイリコ加工場で働き、秋口から畑を耕し出す。

みかん畑には勾配に運搬モノレールが設置されて労働力は軽減されたが、人が歩いて登り降りするのは昔と変わらない。高齢化や過疎化で耕作放棄や崩れたままの石垣も目立ちはじめ、山頂に近い畑は草に覆われ、山に戻りはじめている。

段々畑を耕して四代目になるといふ石川文治郎さん(78)は、さつ

まいもが終わると馬鈴薯、玉葱、ブロッコリー、花野菜と、冬に向かって忙しくなる。段々畑は日照時間が長く、土壌の保温効果も高いので野菜の生産にはよいが、怖いのはヤマジの風と大雨だという。雨水は畑の道を鉄砲水のように下り、石垣も壊す。今年は被害がないが、崩れた石垣を直すのも文治郎さんの仕事だ。

『美しい日本の村景観』に選ばれてからテレビや雑誌で紹介されるようになったのが嬉しい。若いもんは畑仕事をせんので、私の代で終わりがもしれないが、先人が苦労して築いた美しい風景は遺してほしい」と話す。

町も行政的には今のところ何もしていないが、大切な遺産、優れた景観として保存していく手立てを検討しているようだ。

(文・カメラ/小林 恵)



わずかな耕地を作るために膨大な石を積んだ



鹿島漁港と石垣段々畑



奈良時代に始まり明治時代まで続けられてきたという三谷の築石。一千年の時を経た今も家屋敷と水田を揺るぎなく守る貴重な石造文化の里は、地域全体が和風の幾何学模様のように美しい。徳地町には800年前、東大寺再建時に用材の手配で俊乘房重源上人や木地師たちが来村した際の史跡も多く、自然と歴史がいまも息づいている。

徳地町(人口8375人)は山口県のほぼ中央に位置し、東西部は県都山口市と産業都市防府市に、東部は新南陽市に接する交通の要所でありながら、一步町へ入ると佐波川沿いに緑が色濃いう田と赤瓦の家屋敷が点在する美しい田園風景が広がっている。しかし北部は飯ヶ岳、津々良ヶ岳、日暮ヶ岳などの600~900m級の山々、南部へ向かって石黒山、狗留孫山などの400~500mの里山が連なり、総面積の89%を山林が占めており、変化に富んだ地形が三谷のような石垣集落と棚田を今日に残した。

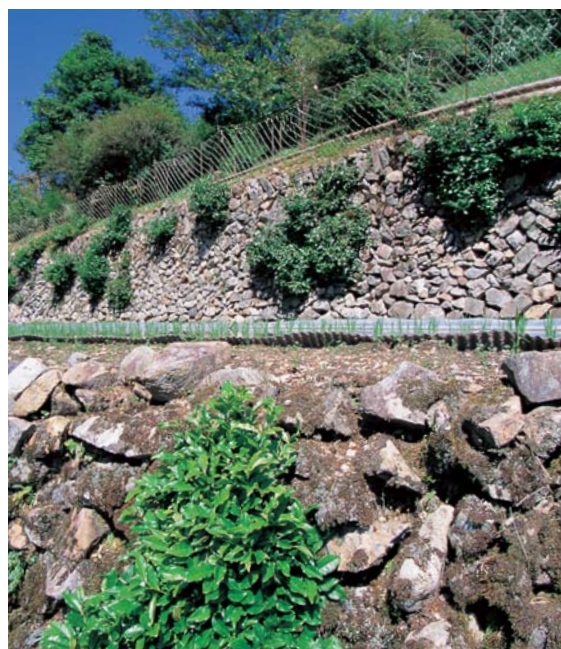
集落は島地川、三谷川、引谷川、滑川などに沿って形成され、それらの清流は佐波川に注ぎ、佐波川は防府市を経て瀬戸内海に山の恵みを与えている。

高鉢山、石ヶ岳を源流にして三谷地区を東西に下る三谷川周辺に開けているのが三谷地

### 山林と清流の里

# 一千年の時を積む 石垣棚田

とくじちょう みたに  
山口県徳地町 三谷



三谷地区の石垣棚田と集落。朱色の瓦が美しい石垣の中に植えられた茶の木。空き地を利用して栽培、地区の人の一年分のお茶を賄っている

区。文治2年(1186)に重源上人が東大寺再建の用材を求めてこの集落の奥山に入ったことから、三谷には奈良原、木地屋、奥谷などのゆかりの地名や、木材を搬出した跡地、岩堂、多くの入夫が死亡しそれを供養した千人塚など、多数の史跡が残っている。

### 高度な積石工法を今に伝える 9kmにおよぶ石垣群と茶畑

三谷川に沿って形成される水田は延々9kmにわたり、面積は約40ha。うち斜面に石垣を築いて耕地にした柵田は1000枚に達している。この地方の山や河川に産出する流紋石という自然の石を実にきれいにしつかり組み上げた石垣は、長い年月を経た今も崩壊することはほとんどなく、昔から「三谷の石垣には草が生えない」と言われてきたという。

地域の中央部にある交流会館で待っていてくれたのは、三谷石垣柵田会代表世話人の有井敬三さん(57)と柵田オーナー制度設置や運営等の指導に当たってきた(社)徳地町農業公社の山根洋達さん(59)。

交流会館は、昨年3月で廃校になった三谷小学校の跡地に誕生した施設で、地域の人たちの文化活動やオーナー達との交流活動に使われる。今年の田植えに合わせてオープンしたものでヒノキの香りにあふれている。

「先祖から引き継がれてきた千枚の石垣柵田も、農家の高齢化などで最近では荒れている田が増えてきました。三谷地区が元気になるように、石垣柵田を守っていく方法はないかと思案してきて柵田オーナー制度と出会いました」と有井さんは言う。

昭和47年に169戸、693人だった三谷集落は、現在100戸足らず150人になり、農業の担い手は高齢化している。オーナー制度には柵田を持つ17名の地権者が参加、3年

前からスタートした。オーナーは1畝3万2000円、2畝5万4000円の会費で田植えや稲刈りに参加、採れたお米のすべてと農家の作った野菜などを年2回プレゼントされる他、蕎麦打ち、しめ縄づくり等のイベントに招待される。現在33組のオーナーが登録するまでになった。「初年度はこちらの受け入れ体制を考えて20組にしましたが、希望者が増えたため徐々に増やしています。リーダーも9組おり、福岡からも3組がやってきます。清流と山間部の気候、肥沃な土壌の田で作った柵田米は美味しいと人気です」

有井さんの家は農業のかたわら、父親の時代まで石工をしていたが、新たに石積みをする農家が少なくなり廃業した。今は石垣にもコンクリートが増えているという。

「コンクリートは豪雨や長雨などの時に地中の水をスムーズに排水できないので壊れやすいんです。今後でもできる限り伝統の積石工法を維持していきたいと思っています」と山根洋達さんは言う。

山根さんは柵田オーナー制度の提案者で、事務局を手助けしている農業公社の事務局長。柵田オーナー制度導入に際して石垣の調査を行い、その文化的価値を再確認したという。

三谷の石垣は推古17年(609年)聖徳太子が鹿野に清涼寺を建立した時に技術が伝えられ、奈良時代から明治時代までの一千年間築石されてきた。「建築学や民俗学の専門家がよく見えますが、積石状況により時代がわかるようです。幾つかの工法がありますが、いずれも表面積は小さいが法尻を長く取り、小石を敷き詰めた安定性の高い工法で築かれています。山の上の方には耕作しなくなった田が



上/三谷石垣柵田会世話人有井敬三さん(左)と山根洋達さん  
中/新設した交流会館 下/背の高い石垣には中程に足場石を組んでいる

城壁のように大きな石をウェーブをつけて組み上げている家屋敷の石垣

民家を移築し体験工房として活用している「重源の郷」。マイクロバスの送迎もあり、観光地として人気



あり古い時代の石垣が一部崩壊しています  
が、地区内では崩壊はほとんどない。草を生  
やさないことが石垣を守るコツで、5mもあ  
るような屋敷の石垣には真ん中に足場用の石  
を組んでいたりします」  
「草も生えない」といわれる石垣だが、農家  
の生活に役立てようと昔からお茶の木が植え  
られてきた。  
「ここらの農家は市販のお茶は買いません。  
どこも自家製のお茶で一年間に合っている  
んです。会員の人からの要望で今年から茶摘  
みを体験する会も開きました」と有井さん。  
田を少しでも広く使うために石垣を機能的  
に配した先人たちの知恵は、野面石積み、割  
石積み、乱層積み等の独自の積石工法を生み  
出し、さらに給水路を地下に埋める「暗梁垣  
(蛇口)」などの高度な技術が随所に生かされ

深谷地区の一角に、自然をそのまま生かし  
て、なつかしい昭和初期の里山を再現した  
もので、古い茅葺き民家や典型的な農家を  
移築再現している。  
クルマを駐車場に入れて入館料(大人一人  
500円)を払うと、「袖入りの道」を歩い  
て工房やレストラン、文化伝承館へ向かう  
ことになる。自然のまま、手を加えてない  
美しい谷間沿いの道で、季節の花や山野草、  
古木が茂り、恰好の散策コースになってい  
る。  
やがて右手に食事処、左手に工房などが  
現れ、工房では木工、紙漉き、染色、炭焼  
き、竹細工、機織りなどが体験でき、お年  
寄りや専門家から技術を伝承した若者が指  
導に当たっていた。  
昼食には、町のお母さんたちが腕を振る

ている。また、棚田の外側  
の山間部や屋敷回りには、  
イノシシなどから農作物を  
守る「しし垣」や「家垣」「  
背戸岸」といわれる石垣もあ  
る。様々な石垣を見ていると、  
自然と共生しながら里山で暮  
らす人々の、厳しくも豊かな  
集落づくりと、災害への配慮  
が、千年の時を経て鮮明に伝  
わってくる。  
**ふれあい、体験の里  
夢工房「重源の郷」**  
町内外の人にも人気の徳地町  
の観光スポットが、重源上人  
にちなんで開設した「重源の郷」  
過疎化した清流の里・

う食事処「花ひとえ」に入った。広々とした  
和風の室内もよかったが、地元産の食材を  
いかした本格的な会席料理を手頃な価格で提  
供しており、もてなし精神と心意気を感じさ  
せてくれた。  
重源の郷では6月には「菖蒲祭り」、「あじ  
さい祭り」というように、土日曜日にはイベ  
ントを開催、夢広場ステージでは邦楽演奏会  
や徳地人形浄瑠璃などを公演している。  
今回の取材で各地を案内してくれた徳地町  
経済課観光係柳伸一郎さんは、「重源の郷は、  
まず自分たちの町にはこんなに素晴らしい文  
化財や伝統工芸等があることを理解してもら  
おうと開設しました。町民の趣味・創作活動  
が高まり、その拠点になっていますが、町外  
の人の入館も多くなりました。豊かな自然や  
農産物の美味しい町として住民が誇りを持ち、元  
気な町にしたいと思っています」と語る。  
取材の後、町のメインストリートにある特産品  
直売所「南大門」へ寄ってみた。味噌、どんこ等  
の伝統的物産の他に、朝  
取り野菜や和菓子、和紙、  
陶器などの工芸品も展示  
販売しており、すべてが  
町で生産加工したものだ。  
それが消費者の信頼と徳  
地町のPRにも繋がりに、  
町の表玄関として賑わっ  
ていた。

(文/浅井登美子  
カメラ/岡本良治)



案内してくれた役場経済課柳さん



ホテルが飛ぶ佐波川

- ・三谷石垣棚田会 ☎0835-53-0031 (徳地町農業公社)
- ・徳地町役場経済課 ☎0835-52-1117



空地には季節の花が咲き誇る



先人の遺産を未来へ——3

# 山津波の教訓を今に 四谷千枚田

ほうらいちょう  
愛知県鳳来町

徳川家ゆかりの歴史的建造物、中京の奥座敷「湯谷温泉」、さらには森と川を生かした愛知県民の森等、豊かな自然と文化の里・鳳来町だが、いま新たに注目されているのが「四谷千枚田」。鳳来町の北端、四谷・大代地区のなだらかな斜面に広がる棚田群で、田の数は1269枚あるといわれるが、現在は約850枚。1枚平均0.9aの田を39戸の農家が耕作している。一戸当たり平均21枚だが、最高62枚を耕作している人もいるとか。

ここ大代地区では、明治37年に田植えが済んだ頃から20日間余り雨が続き、背後にある鞍掛山と通称びんぼう山の谷間に泥土がたまり、雨水が溢れて山津波となって田畑と10戸

の家屋を流失し11人が死亡するという事故が起きた。一時は途方に暮れた村民だが鍬とモッコで復興に立ち上がり、何年もかけて荒地を田に変えて千枚田を作り上げた。土砂崩れしないように石垣をていねいに組み上げ、山頂から下の水田まで石でしっかりと組んだ用水路を築いた。山津波以来農家は大半が別の高台などに移り、農作業に通ってくる。

町ではこの千枚田を町の歴史的文化遺産、有機農業の振興地区として保全・発展していくと平成2年に人口近くの杉林を伐つて見晴しを良くし、看板を立てた。真ん中を貫通するあぜ道程度だった道路も軽トラックが走れる広さに整備され、休憩できる東屋も数カ所設置された。

ピカピカのオートバイで颯爽とやってきたのは小山衛さん(68)。30枚の田を耕作しており「道が整備されたので作業も見回りがとてもやりやすくなった」と語って、バイクから降りて水の見回りに出かけた。地域としては棚田オーナー制度は実施していないが、農家によつては個人的に都会の人に貸している田もあるようだ。

「田植えと稲刈りの時は地区の農家が手伝いに来てくれるから人手不足で困るということはない。でも農家の高齢化や減反政策等で、稲作を辞めて梅林や茶畑にしたり、アヤメ等の花を植えている田もあります」と小山さん。

「ここのお米は普段食べているので気にしなかったが、美味しいから分けて欲しいという声も増えてきました。写真を撮りに来るカメラマンや見学に来る都会の人も多くなり、来年はここで棚田サミットが開催されるそうだから、我々も一層頑張らないとね」と語る。道路脇の小さい田に「みんなのたんぼ」と看板を立てた連谷小学校児童達の田があっ

た。昨年からは総合学習の一環で棚田の調査や田植え等を実施している。四谷地区の子供達が学んできた連谷小学校は最高児童数187名の時もあつたが、今年入学した一年生はたった1人、全児童で16名となり複式学級となっている。

子供達はこの千枚田が稲作以外に何が作られているか、棚田を耕作する費用と収穫したお米代などの経済状況などを調査した。ある農家をモデルに調べたところ、トラクターや田植機等の費用(購入費の1/10)、苗代、肥料、消毒費等の出費が22万4500円となつた。それに対して収入は棚田で採れたお米代(市販の米代で計算)は23万4500円。農家のおばさんを訪ねて「1万円ほど儲かるよ」と報告したところ、「他に、もぐらや蟹の穴を防ぐ波板を張ったり、イノシシ除けのトタンや電流を設けるので儲けはゼロだね。でも棚田があるから土砂や水害もないし、美味しいお米も食べられる。だから皆で守つていかならんね」と喜んでくれたという。

春にはタンポポが千枚田を真っ黄色に染め、いま水を張った田の中では沢山のおたまじゃくしが泳ぎ、水辺ではクレソンやセリが花を咲かせている。そしてホタルが飛び交い、カエルの大合唱がはじまる夏になる。

(文・カメラ/浅井登美子)  
オートバイに乗って農作業にやってくる小山さん





# 石積で山間部を近代的な農地に 戸川石垣の集落

ひのかけちょう  
宮崎県日之影町

## 石倉は穀物の保管に最高

駅の中に天然温泉があることで評判のTR高千穂鉄道「日之影温泉駅」から、日之影川に沿って約8キロ。石垣の村と呼ばれる戸数7戸の宮崎県日之影町戸川集落は、田植えが終わったばかりでひっそりとしていた。県道脇に石垣の文化を継承するために建設された第三セクター経営の「石垣茶屋」も、開店休業だ。

「石垣茶屋」の玄関先で野良着姿の婦人が立ち話をしていた。約束をしていた坂本博さん(65)の家を尋ねると、すぐ目の前の高さ7〜8mはありそうな石垣を指さし「家におりましたよ。待ちよかったですよ」  
奥さんの美穂さん(60)だった。

角に丸みを残した一抱えもある灰石を積み上げた石垣に沿って急な坂道を上ると、博さんは届いたばかりの合鴨のヒナを世話していた。「ヒナは寒さに弱いもんですから、7月に入ってから田んぼに放します。合鴨で作った米を待つてくれる人が居るもんで」

庭に、鉄の扉をつけた石積の倉が建っている。石倉の石は角をきつちりと直角に削り、石材として完璧な加工が施してある。石垣と時代が違っても使っている。米や麦を保管する他、物置としても使っている。その隣に、やや小さめの石積の小屋。真っ暗な室内。常時水の流れ込む大きな石の水槽があり、中に入るとひんやりする。漬物小屋として使っているようだ。石倉の探索をしている間に、美穂さんが下の県道から戻っ

てきた。

「せっかく取材に来てくれたから、石垣の草むしりでもしますかね」と、美穂さんはアルミのハシゴを担いで、納屋下の石垣へさつさと歩いて行く。彼女を追いかけて行くと、もうハシゴによじ登ってバリバリと石垣の隙間から生えている草を、手でむしっていた。  
「年に4回は、むしろんと草の方が先になってとすよ、どつしても」

石垣は管理しないと崩れる。見渡せば集落全体が石垣の上だ。石垣の面積が平地より広いのではないだろうか。草取りの労働は、相当なものと思像できる。

## 石工技術を生かして稲作 畑作

合鴨の世話を終えた博さんに「石垣の村」の歴史を聞いた。

「私の6代前の先祖にあたる坂本寅太郎さんという人が居ってですね。体は小さい人だったそう。5歳の時に、食べ物がなかったからじゃらう、父親と一緒に、今の延岡の奥の行蔵へ大豆を米と交換してもらったために行ったそうですわ。その時の大変さを大人になっても覚えていて、田開きを始めましたそつです」



左 / 坂本博さん、美穂さん、ケサノさん  
右 / 漬物小屋として使っている石倉





「最も古い石垣は、江戸末期の嘉永から安政のころに築かれたそうです。一番やりにくい所は俺がやっちゃよく。やりやすい所は、後で誰でもできる、と難しい所を率先してやっただけです。これを作る頃は、道具もなかったですから、どうやって作ったものやら想像できませんね」

この寅太郎と富士本嘉三郎、坂本柳蔵の3人が、戸川集落での石工の技術を見込まれ、安政2年の大地震で崩れた江戸城の修復工事に呼ばれたと言いつたに聞かれています。そんな先祖が戸川集落住民の誇りなのである。

「今、考えてみると先祖の仕事がこんな形で残っているというのは、偉大なこと。何であの頃に、長い目で見えた仕事が出来たのか。土で作った田んぼだったら、崩れてしまっただけでしょう。感心しておりますね」

しかし、資料によると戸川に本格的な水田が作られたのは、大正初期、地元の稲作に情熱をかけた有志が、日之影川の対岸からトタン板を丸めた180mの樋をワイヤー線に掛けて、水田用水にした。この水は5反の水田を灌漑したそう。その後、大正9年から始まった七折用水が大正13年に開通して以降、現在の棚田が完成している。先祖から受け継がれた石工の技術があつたからこそ、他の集落に先駆けて棚田を開くことができたのである。

稲作と並んで戸川の豊かさを支えた作物に、昭和20年頃から盛んに栽培されたシュロとコンニャクイモがある。シュロの皮は、ミノ(雨具)や田植え網の材料として高値で販売され、マニラ麻やビニール製品が出てくる昭和30年頃まで栽培された。全山が石灰岩質の戸川岳麓にある戸川は、コンニャクイモの栽培に適した土壌であった。

「肥料は使わないでも、質の良いコンニャクイモが200俵もとれました。一俵7000円以上はしましたから」と、博さん。

「その他に、戸川が良かったのは、私の3代前の人が吉野スギの苗を取り寄せて。そのお陰で2回は余計に収入を取っちゃよるですわ。見立鉱山のトロッコと道路があつたでしょう。最初はトロッコ、次にはトラックで出荷して、その頃はホクホクじゃったですよ」

戸川集落の下を流れる日之影川の上流に、内藤家経営のスズ鉱石を採掘する見立鉱山があり、早くからトロッコ道や馬車道が開設されていた。その恩恵を沿線の集落である戸川の住民も受けていたのである。

「アメリカ製のテラーを父が買ったのが昭和24年でした。まだ牛の時代で、引き合うもんかと言われたんですが、1町2反の棚田を作りよつたですから。難儀しよつたから、父には機械化の夢があつたのでしよう。宮崎の経済連から買って、汽車で日之影駅に届いて、引き取りに行つたとき、そこで実演して帰つたと言いつたんですが、あれで近代国家になつたちゃんあと思えたですね。田植え機を最初に導入したのも戸川でした。山の吉野スギがものをいうたつてすよ」

石垣を築いた寅太郎の時代から技術を活かして棚田を作り、シュロとコンニャクイモで得た利益は、用水路工事や吉野スギの早期導入の資金となった。その後は率先して機械化を図り、山間地農業労働の軽減化と経営の安定化を実現している。

「戸川の村は、競争する意識が強かつたもんでしょね」と、博さんは苦笑する。そのような先祖の知恵と技と努力によって、「ここだけは昔から、盆、正月に白いままが食べられるということだった」のである。

話にひと区切りついた時、博さんが戸川集落を見下ろせる日之影川対岸の山の中腹へ案内してくれた。田植えが終わつたばかりの棚田に囲まれた7戸の集落は、石垣に支えられ、どっし

りとした安定感があるためか、静かで豊かな時間がゆっくりと流れているように見えた。

### 景観の魅力を発信する

農林水産省が1999年に選定した「日本の棚田百選」に認定されたことを契機とし、戸川集落7戸で「戸川石垣の村管理組合」を結成した。先祖から受け継いだ景観の魅力を積極的に発信していこうというのである。その組合長が、話を聞いてきた坂本博さんだ。

「『石垣の村』は、昭和60年から村おこしとして取り組んできていますが、『棚田まつり』は今年5回目。トロッコ道ウォーキングや地元の神楽やコンサートなどを、レンゲの咲く4月下旬に棚田で開催します。新緑の頃はいいですよ。天気が良ければ輝いて、500〜600人の参加者があります」

しかし、「棚田まつり」は、戸川集落にどんなメリットがあるのか。

「人間が交流する良さはあります。もてなしをして、一日、喜んでもちろって楽しもうということですね。戸川の名前は広がっていきます。でも、7戸全部が快く受け入れてくれるわけではありません、はっきり言って」



上/畑の石垣の草刈に出かける坂本博さん夫婦  
下/高さ12mの石垣の畑

## 草地景観

牧場と日高山脈の山並	北海道三石町*
阿原山牧野	岩手県江刺市
茅場と茅刈り風景	富山県平村*
牧の入茅場	長野県小谷村*
蒜前高原	岡山県川上村、八束村*
恩原牧場上ノ成ル	岡山県上齋原村
角島の放牧	山口県豊北町*
都井岬	宮崎県串間市*
額娃野の放牧場	鹿児島県額娃町

## 河川・池沼・湖沼・水路景観

しろうお漁	青森県蟹田町
冬の葦原	青森県中里町*
十三湖の景観	青森県市浦村*
久慈川の鮎漁	茨城県大子町
健武ゆりがねの梁、久那瀬の梁	栃木県馬頭町
熊野川スキ追い漁	和歌山県熊野川町
栗野川の川漁	山口県豊北町
蛇行する六角川と直線水路	佐賀県大野町

## 集落に関連した景観

藤枝の茅葺き集落	青森県金木町
西浜のカッチョ	青森県市浦村
北ノ又茅葺き集落	秋田県五城目町
飯豊の散居集落	山形県飯豊町*
しな織りの里・関川	山形県温海町
マキの生垣	千葉県丸山町、富浦町
東谷地区の集落	石川県山中町*
芦川村の石垣	山梨県南アルプス市
千国真木集落	長野県小谷村
西伊豆海岸の農村風景	静岡県西伊豆町
伊根の船屋	京都府伊根町
深野神明神社鎮守の森と集落	奈良県室生村
くずの里	奈良県吉野町
板井原集落	鳥取県智頭町
出羽盆地の河岸段丘	島根県瑞穂町
青石畳通り	島根県美保関町
中谷の石倉	徳島県美郷村
外泊の石垣集落	愛媛県西海町*
立川のコウゾ、ミツマタ	高知県大豊町*
棚底の石垣群	熊本県倉岳町
傾山系と上畑集落、木野の防風生垣	大分県緒方町
農村集落と鏝絵	大分県安心院町
イノシシ狩り	宮崎県椎葉村
垂水の漁村と櫻島	鹿児島県垂水市
トンボロ	鹿児島県里村
祖納集落	沖縄県と那国町



飯豊町の散居集落

「石垣の村管理組合の組合長は、難しい立場に立たされているようだ。戸川のイメージダウンじゃ困るからよ。それだけですわ」



た。はるかに見上げる高さまで積み上げられた石の数々を見ていると、「無垢の魂」を感じた。石垣の上の畑を見たくなり、脇の急な坂道を登りきると、石垣の面積よりはすっと狭い畑がある



博さん宅から庭続きの坂本ヤヨイさん(66)宅の裏に「日本の棚田百選」の選定委員の一人である中島峰広早稲田大学教授が、「日本」と折り紙をつけた高さ12mの石垣があると聞いて訪ねた。ほとんど村人に会うことのない戸川集落を歩いて考えた。ここに必要なのは一日だけ楽しく開催されるイベントより、先人たちの知恵や努力が詰まっている戸川集落の歴史を学び、今に活かす道筋を一緒に考えて考え労働する、ワーキングホリデーシステムではないのだろうか、と。

(文・カメラ 芥川 仁)

「以前はソバを植えてあったのだろうが、雑草に取り囲まれて荒れていた。ヤヨイさんは今、ひとり暮らしだそうです。昨年はお盆すぎに秋ソバを蒔くつもり。8月の24、25日が蒔きの適期と母から聞いておりますから」

戸川集落が抱えている現実の一端を見たように思えた。

・日之影町企画開発課 ☎0982(87)3910

全国過疎問題  
シンポジウム  
2004 in わかやま  
(10月13日~15日)

開催地 / 和歌山県上富田町、白浜町ほか



メインテーマ

[ 新たなふるさとづくりを目指して ]

- ・10月13日(水) プレイベント  
視察・夜学(龍神村、本宮町)
- ・10月14日(木) 全体会(上富田文化会館)  
基調講演 / 川勝平太  
(国際日本文化研究センター教授)  
パネルディスカッション  
交流会(コガノイベイホテル)
- ・10月15日(金) 分科会(コガノイベイホテル)  
第1分科会 / 過疎地域自立活性化優良事例発表  
第2分科会 / 過疎地域の活性化と緑の雇用  
第3分科会 / 地域資源の活用と過疎地域の自立

編集後記

ケビン・ショート氏が「エッセイ」で日本は世界有数の「里山」の美しい国だと書いている。そう思って見てみると、日本庭園風の集落、日本画を思わせる川や森、絵ハガキにしたいような田園など、どこもっておきの里山ぞろい。そこで「DePOLA」では、景観の美しさは別の雑誌や写真家に任せ、「自然と人と生き物が輝く」地域を里山と定めて企画編集した。

佐渡新穂地区の、冬も湛水して水生動物や微生物で地力を高める「不耕起田」に取り組む農家グループ、トキのために田んぼでドジョウ等を60年間も飼育してきた高野さん、各地から消えてしまった葦原を保全したいと全国の茅葺き民家保存や葦の腐葉土等を開発している熊谷さん一家、そしてハチ博士の富永さん等々、自然や生き物を友とする遊び心いっぱいの魅力的な人たちに出会うことができた。

雑木林の手入れや活用事例は、茂木町の竹林整備活動のみとなったが、秋冬には山の落葉をかき集めて堆肥を作っている農家が今もあるのかと気になっている。(A)

De POLA No.27

[ でぼら ] 2004年秋冬号

発行日 / 平成16年9月5日

発行所 / 財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24  
オカモトヤビル8階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集協力・印刷 / 株式会社ぎょうせい  
編集工房アド・エー

農林水産業に関連する文化的景観の保護対象地域  
及び重要地域の一覧 (過疎指定市町村) \*重要地域

水田景観

浄法寺城跡及びその周辺景観 岩手県浄法寺町  
沢尻の棚田 宮城県丸森町  
土場沢の水田と集落 秋田県東由利町  
山古志の棚田 新潟県山古志村\*  
上船倉の棚田 新潟県安塚町\*  
松之山の棚田 新潟県松之山町\*  
蓮野の棚田 新潟県大島村  
相川の海際の水田 新潟県佐渡市  
山田の棚田 富山県山田村  
白米の千枚田 石川県輪島市\*  
梨了ヶ平の千枚田 福井県越前町  
大西の棚田 長野県中條村  
四谷の千枚田 愛知県鳳来町\*  
丸山千枚田 三重県紀和町\*  
新井の千枚田 京都府伊根町\*  
袖志の棚田 京都府丹後町  
乙大木谷の棚田 兵庫県佐用町  
和佐父西ヶ岡の棚田 兵庫県村岡町  
二尾川の棚田 和歌山県美里町  
蘭島 和歌山県清水町\*  
大原新田 島根県横田町  
神谷集落の棚田 島根県羽須美町  
都川の棚田 島根県旭町\*  
室谷の棚田 島根県三隅町  
上山の千枚田 岡山県英出町\*  
大坪和の棚田 岡山県中央町  
備後国太田荘 広島県世羅町  
たたら鉄穴流しと金屋子神 広島県君田町\*  
徳地の石垣棚田と茶畑 山口県徳地町  
榎原の棚田 徳島県上勝町  
下影の棚田 徳島県井川町  
本谷の棚田と伊予灘 愛媛県双海町  
白尾・立川袋口の棚田 愛媛県内子町  
泉谷の棚田 愛媛県五十崎町  
広見町の茶堂と山村 愛媛県広見町  
奥内の棚田 愛媛県松野町  
有瀬の棚田、谷和の棚田 高知県香北町  
神在居の千枚田 高知県梛原町\*  
長者の棚田 高知県仁淀村

市野瀬の棚田 高知県佐賀町  
星野村の棚田 福岡県星野村\*  
藤野の棚田 佐賀県相知町\*  
大浦の棚田 佐賀県肥前町  
大中尾の棚田 長崎県海外町  
小浜町の棚田 長崎県小浜町  
寒川の棚田 熊本県水俣市  
産山村の扇棚田 熊本県産山村  
峰棚田 熊本県矢部町  
日光の棚田 熊本県坂本村  
軸丸の棚田 大分県珠洲町  
山浦早水の水田 大分県院内町  
両合棚田 宮崎県西米良村  
向江の棚田 宮崎県日之影町\*  
戸川の石垣の村 鹿児島県栗野町  
幸田の棚田 鹿児島県佐多町  
打詰の初穂田 沖縄県久米島町  
字仲地の集落と棚田

畑地景観

羊蹄山麓の開拓地 北海道真狩村  
美瑛の丘陵 北海道美瑛町\*  
丘陵の畑 北海道端野町  
矢ノ原高原の蕎麦畑 福島県昭和村\*  
南房総の花畑 千葉県千倉町  
美山町の赤カブラ畑 福井県美山町  
越廼村の水仙畑 福井県越廼村\*  
旭豊梨の里 島根県旭町\*  
鹿島の段々畑 広島県倉橋町\*  
みかんの段々畑と石垣 広島県豊町  
秋吉台のドリーネ畑 山口県美東町\*  
木頭柚子の里 徳島県木頭町\*  
梅林、高開の石積み段々畑 徳島県美郷村\*  
石畳東のたばこ畑、江子の柿畑 愛媛県内子町  
段々畑とリアス式海岸 愛媛県吉田町  
柳の防风垣 長崎県大瀬戸町\*  
仁王谷の茶畑 熊本県中央町  
シシ垣の里 大分県鶴見町、米水津村、蒲江町\*  
金見のソテツ群と畑 鹿児島県徳之島町\*  
沖永良部島のタイモ畑 鹿児島県知名町\*

星の里 杣の里



平成15年度ビデオが第42回日本産業映画・ビデオコンクールで日本産業映画奨励賞を受賞

熊本県と大分県に境を接する福岡県八女郡の過疎の2村を紹介する。あえて秘境と名付けることで村にある自然という宝物に村民自らも気付いた。都会からのお客さんを温かく迎えるのに、よく手入れの行き届いた村の古い家々を開放してはどうだろうか? ホスピタリティーに満ちた縁側構想は、おばさん(土地の言葉で「おばさん」のこと)たちのやさしい発想が活かされている。

何よりも村に住む人たちが村に暮らす楽しさ、豊かさを自覚してお客を迎える姿勢が都会の人々に喜ばれている。CATV放送中。星の里・星野村 / ふるさとの縁側で 都会人をもてなす 杣の里・矢部村 / 都会人に贈る 秘境の宝物

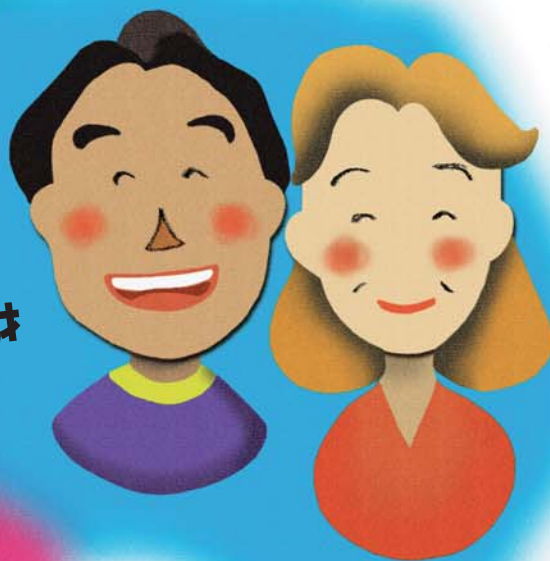
オール世代、  
宝くじで  
いじろます。

ゆったり旅行



趣味に悠々

マイホーム  
手がたい蓄財



海外留学  
結婚資金



宝くじの収益金は、  
身近な街づくりに役立っています。



財団法人 **日本宝くじ協会**

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。